



附

錄

附 錄 目 次

一、響堂山彫刻零拾……………九九

彫 例 一—八……………九九—一〇〇

二、響堂山附近の歴史地理……………一〇七

三、響堂山石刻錄……………一二七

石 刻 例 一—三……………一六—一七

石 刻 錄 文……………一九

石 刻 目 錄……………一四八



磁縣 民衆教育館藏

B 獅子



蘆屋 山口謙四郎氏藏

彫刻例 二

A 供養比丘形



蘆屋 山口謙四郎氏藏

A 獅子

北平古玩舖藏



B 供養比丘形

京都貴志彌三郎氏藏



B 琵琶樂天

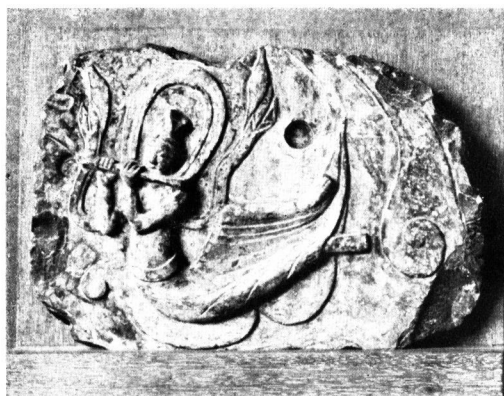


寶塚 藤木正一氏藏

A 吹簫樂天



寶塚 藤木正一氏藏



A 樂天二種



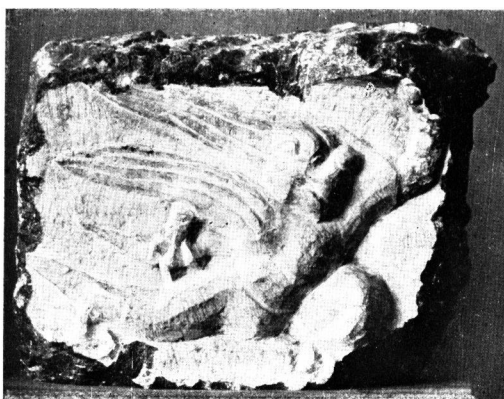
蘆屋 山口謙四郎氏藏



B 走形怪獸形



寶塚 藤木正一氏藏



C 走形怪獸形



蘆屋 山口謙四郎氏藏

B 跨踞怪獸



A 跨踞怪獸



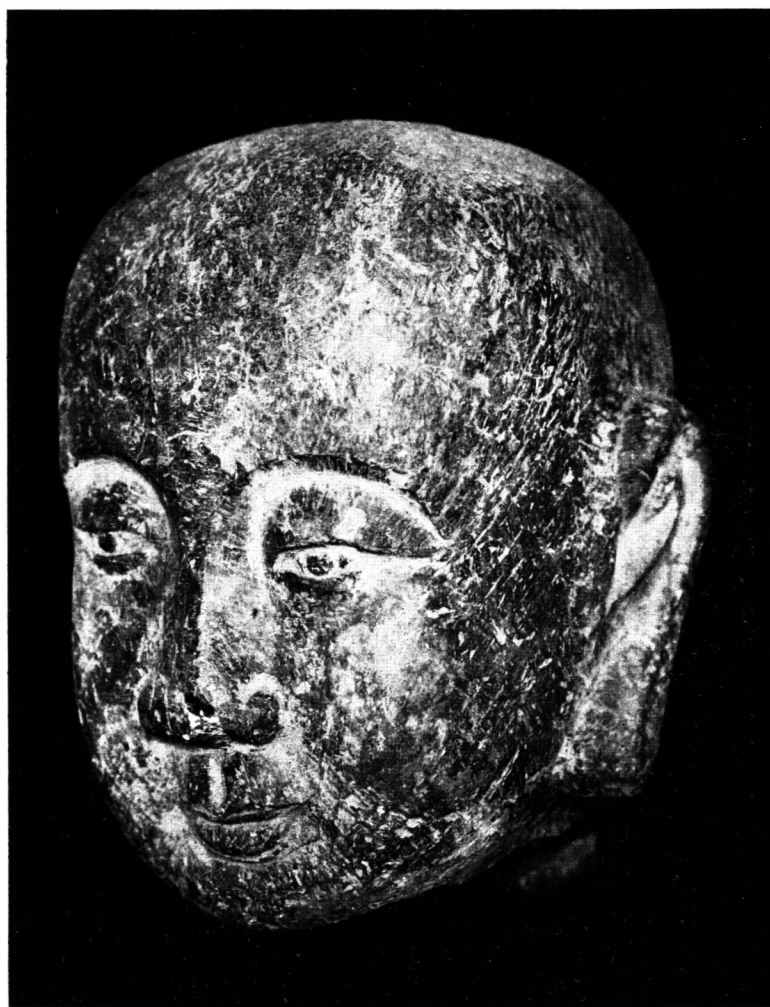
A
比丘頭部

磁縣民衆教育館藏



B
比丘頭部

磁縣民衆教育館藏



A
飛天

御影黒川幸七氏藏



B
侏儒形

蘆屋山口謙四郎氏藏



附錄一 響堂山彫刻零拾

1	佛傳浮彫	8	琵琶樂天	15	走形怪獸
2	供養僧形	9	吹簫樂天	16	走形怪獸
3	供養僧形	10	不詳樂天	17	蹲踞怪獸
4	獅子	11	飛天	18	比丘頭部
5	獅子	12	飛天	19	比丘立像
6	獅子	13	飛天二種	20	侏儒
7	吹笛樂天	14	供養飛天		

響堂山石窟の破壊は別に近代にはじまつたことではないが、近代に至つてはじめて美術品賣却を目的とする破壊が行はれ、またいまも行はれつゝある。これは東亞古美術のたみに誠に慨歎すべきことである。しかもこれが修補は拙惡を極め、當初における造形の眞面目は全く失はれつゝある。といふより彫刻においては全く失はれてしまつたといつても過言ではない。ワシントンのフリヤ美術館にある浮彫二、山口謙四郎氏藏の河神像が所傳のごとく響堂山の彫刻にほかならぬことは既に述べたとほりである。いま響堂山と傳へられるもの、及び響堂山と推定されるものを捜求し、こゝに掲出して、失はれた響堂山石彫の一部を補ひたい。

1 佛傳浮彫〔彫刻例一〕

磁縣民衆教育館藏

高さ一米、幅一米一五、數片に破斷して空隙がある。全體としてもなほ大きな壁面の一部に屬したものである。てうど第一洞方柱前額部などに見るとき浮彫の一部であらう。しかし、響堂山のどの窟どの部分にあつたかは推定できない。下端に狭い框縁をのこし、向つて左半には下に山嶽の重々たるをあらはし、その上に笠松狀の樹葉をもつた木をつくる。樹下には圓光を負ふ蓮座上の座佛をきさみ、その右に供養飛天あり、その下に三人の蓮上供養の座像がある。いづれも雙手に大きな球狀の盒子を捧げてゐる。右下は破殘してゐるが、同様な樹下に思惟太子像をつくり、その脚下に白馬が跪いて足を甜めてゐる状況をあらはす。馬の後方に四人の蓮上供養者が見える。第一洞方柱前額右方とひとしく太子別離の圖をあらはすものと見える。左半の圖は詳らかでない。

彫法全く響堂山風であつて、簡樸である。豐滿で丸味をおびた肉體にわづかに衣がまゝふてゐる。皺褶の併行線は全く見えない。硬直せぬ安易な肢態にこの時代の特徴はよくあらはれてゐる。人物相錯綜しながらも樹木と尊像を中心にし、多少上下にづらしてそれぞれ一場面をまとめてゐる。

2 供養僧形〔彫刻例二A〕

蘆屋山口謙四郎氏藏

高四六浬。供養僧形をあらはす側面浮彫である。第二洞方柱基壇のものであつたかも

知れぬ。面貌は豐滿純樸、衣褶は簡單で、しかもその下から丸味のある肉體がうかゞはれる。その右上膊部は殊によく特徴をあらはしてゐる。雙手には何かもつてゐる。

3 供養僧形 【彫刻例三B】

京都貴志彌三郎氏藏

現高二九糎。前者によく似た供養僧形で、いま下部を存しない。或はこれが第二洞方柱基壇のもので、前者はむしろ北響堂山の北洞、或は中洞の方柱基壇のものかと思ふ。

4 獅子 【彫刻例二B】

蘆屋山口謙四郎氏藏

高さ二五糎。蹲踞の側面をあらはした獸形であるが、面貌は斜位になつてゐる。やゝ瘦軀で、頭部小さく、翼なく、雙角をもつゐる。響堂山將來と傳へるが、おそらく北響堂山の中洞、北洞であらうか。

5 獅子 【彫刻例三A】

北平古玩鋪藏

高さ四五糎。蹲踞獅子の側面觀である。重厚な體軀、面貌大きく、髮毛豊かである。形像はすこぶる獅子に近い。彫法簡樸であつて、こまかい鑿の面が見える。手法全く響堂山式であるが、これは別にその傳へをもたない。

6 獅子

〔圖版扉カット〕

御影 黒川幸七氏藏

高さ一七糎。幅一九糎。上下は破碎されたが、左右は大體この幅のものらしい。彫法少しく弱いのは幾分隋に近いためであらうか。周邊の連珠文帶に特色がある。

7 吹笛樂天

〔彫刻例四A〕

寶塚 藤木正一氏藏

現高四四糎、下半部を喪失する。正面に向ひ、横笛を口にあててゐる。簡略な寶冠をつけ、豐滿な面貌を見る。細い鑿迹をのこすが、皺褶をつくらず、豊かな肉付きを大まかにあらはしてゐる。つぎの三個の樂天と同軌であつて、おそらく同じ寶壇の周圍をとりまいたものであつたと思ふ。果してどの窟であつたかはいま想像の及ばぬところであるが、同工異曲の樂天像は鞏縣石窟寺の腰壁にある。

8 琵琶樂天

〔彫刻例四B〕

寶塚 藤木正一氏藏

現存高さ八三糎。前者と全く同制、また同様に下半を失つてゐる。たゞ顔面を斜位に保ち、胸部に琵琶をいだいてゐる。簡素な彫法、溫雅な面貌である。

9 吹簫樂天

〔五六頁カット〕

大阪小澤龜三郎氏將來

斜位にて排管（簫）を口にあて、肩をいからし、簡素なうちによくその動作にふさはしい肢

態をとつてゐる。これも下半部を失つてゐる。

10 不詳樂天 【五六頁カット】

大阪小澤龜三郎氏將來

同制。斜位にて、口に何かの樂器をあて兩頬をふくらませてゐる。兩頬をふくらますのみならず、眼をやゝ俯目にし、肩をはり、かなり力をいれて吹いてゐる様子が見られる。これも下半部を失つてゐる。

11 飛天 【英文扉カット】

東方文化學院京都研究所藏

手に何かを捧持せる供養飛天である。高二七糎。幅二一糎大の斷片で、姿態が横に流れず、まうしろに足部を表はす。

12 飛天 【附錄扉カット】

御影黒川幸七氏藏

琵琶を奏する樂人飛天で、高二〇糎、幅二三糎大の斷片である。山口氏藏のものと殆んど同じく、顔の向きが少しく異なるのみである。

13 飛天二種 【彫刻例五A】

蘆屋山口謙四郎氏藏

吹笛と琵琶の樂人飛天である。一五糎大の人物で、幅二五糎大の斷片である。上半身を

おこし、下半身を歪曲してゐる。歪曲ははなだしいが、躍動的でなく、幼稚な面貌と體軀とをそなへてゐる。背景の地には火焰の曲線をとゞめ、もと佛像の光背であつたことを示してゐる。響堂山と傳へるが果してどの洞窟にあたるかは推定できぬ。

14 供養飛天 【彫刻例八A】

御影黒川幸七氏藏

寶華様のものを捧持する供養飛天で、顔は後方をふり返つた形をとつてゐる。破碎が甚しくて姿態の線を完うすることができないのは遺憾である。このほかこの種の飛天斷片は數種小澤氏によつて將來され、いま諸家に分藏されてゐる。

15 走形怪獸二種 【彫刻例五B】

寶塚藤木正一氏藏

16 走形怪獸二種 【彫刻例五C】

蘆屋山口謙四郎氏藏

右の四個は全く同種の怪獸浮彫であつて、現存高さ約一四釐。上下に框縁の若干を遺存してゐる。南洞寶座、中洞寶座のごとく寶座胴框の束間を填めた浮彫であらうことはほとんど疑がない。怪獸の飛走せるごとく、側面形で脚を開き、手を振り、髪の毛と翼毛とを後方になびかせてゐる。刀法簡單明晰にして、一々その迹をたどることができる。

17 蹲踞怪獸二種 「彫刻例六」

北平古玩鋪藏

高さは約七十糎。あきらかに北洞周壁の怪獸である。いづれもいま數個に破斷してゐる。柱礎に蹲踞する正面形の怪獸で、膝を屈し、腕をつき、肩を張つてゐる。翼毛は左右にひろがつて上昇する。面貌はいはゆる漢代の獸面に一致し、また獅子の面にも共通してゐる。乳部や、腹部の膨らんだのが一つの特色であり、四肢筋肉の緊張が第二の特色である。雙角あり、小耳がある。一方は舌を垂れるが、他は舌を出してゐない。

18 比丘頭部二種 「彫刻例七」

磁縣民衆教育館藏

高さはいづれも凡そ二五糎。丸彫比丘頭である。出土地不詳であるが、おそらくこれも響堂山石窟より將來されたものと思ふ。脇立聲聞形の頭部であらう。左は大きな圓い眼、右は平たい波狀の眼で、相違するが、全體としてはよく一致し、むしろ加葉、阿難の一對ではないかと思ふ。幼稚な表情の面貌で、刀法は簡明である。

19 比丘立像 「七三頁カット」

巴里ヴォルヒ商會舊藏

完好な比丘立像である。高さ九一糎。やゝ扁平な獨立像で蓮華飾の圓光を負ふ。面貌も扁平で、顎骨強く、下顎は前に出で眼は細く波狀をなす。雙手に盆子を捧げ、右肩をあらはす。衣は下すばまりで、その線の走行は至極緩慢である。全く南洞諸尊に強く一致し、そ

の形式から北響堂山の所産と推定する。少くとも北響堂山南洞の彫刻と同一派によつて
きざまれたものであらう。(O. Siren, *Chinese Sculpture*, London 1925, vol. III, pl. 332)

20 侏 儒

〔彫刻例八B〕

蘆屋山口謙四郎氏藏

現存高さ三〇釐。蓮座の下に盤踞する正面形の侏儒である。胡座し、腕を立て、頭部と肩
部にて蓮座をうけてゐる。眼球は飛出し、鼻・口・耳も大きくて、面貌は愧偉、體軀は上から壓縮
されながら、反撥して瘤々と張切り、弾力性をたゞへてゐる。南洞の左奥にある柱礎の侏儒
を参照せよ。これも南洞あたりから出たものであらうか。

*

以上において響堂山と傳へられ、もしくは響堂山と推定される彫刻類を列擧したのであ
るが、その間におのづから一貫した特色が見出せるものと思ふ。それは表情の純眞さと彫
法の簡明さであるといへるであらう。とにかくこれで最近の俗惡な塗抹から脱れた響堂
山彫刻の眞容をいくぶんなりと傳へることができれば本篇の目的は達せられたわけ
である。それが現地を離れた斷片零石であることはもとよりわれわれの深く憾みとする
ところである。

附錄二 響堂山附近の歴史地理

1 地理沿革

響堂山、或は鼓山はいま河南省武安縣と河北省磁縣にまたがつて位置する。この地は春秋時代に晉の土地であり、戰國時代には趙の地であつた。秦の天下を奄有するに及んで邯鄲郡に屬したが、武安の名は既に戰國時代からあらはれてゐる。

漢になると武安縣の地であつて、この縣は鄴・館陶・内黃・魏・涉等の十八縣とともに魏郡河南省臨漳縣に屬してゐた。魏郡は太行山脈の東麓において漳水の兩岸をふくむ地域であつた。

『漢書』地理志の注記によれば、武安縣には欽口山があり、こゝより白渠水が出で、東流して列人縣肥鄉縣に至つて漳水に入る、別に洺水があつて東北に流れ東昌武邑縣に至つて漳沱河に入る、郡を過ぐることに五、行くことに六百一里、鐵官があるといふ。いま東流して漳水に入る白渠水を滏陽河もしくははその一支流、東北流して漳沱河に注ぐ洺水を洺河と見れば、漢の武安縣は右の兩河の發源地をふくむ地域でなくてはならぬ。したがつて欽口山は鼓山もしくはその一部をさしたものと見てよからう。さらに北魏酈道元の『水經注』卷一「漳水の條を見ると、武安縣の西には清漳水流域を占める涉縣があり、やゝ東北に武始縣があつた。そして武安

縣自體は南の方濁漳と清漳の合流する黍稷邑にまでのびてをつた。かうして見ると漢の武安縣は大體において今日の武安、磁縣の地をふくんだものであつたことが知れ、鼓山はあつたからその管下にふくまれてゐたことがわかる。

後漢になつて武始縣後漢書郡國志は廢止された。これは武安縣に合併されたものと思ふ。

魏は都を鄴河南省臨漳縣に奠めたから武安も司隸廣平郡に屬することになり、鼓山と潞水とは京

西の名勝となつた。黃初三年西曆三二二には武安縣を析いて臨水縣をおいた。おそらく漢の武

始縣の故地であらう。たゞ漢の武始縣は白渠に入る拘澗水あり、やゝ北方にあつた漢書地理志水經注

と思はれるのに、臨水はその名のごとく潞水に臨んでゐると思はれるので、少くともその縣

治ははるかに南方に移駐したものと思ふ。樂史の『太平寰宇記』卷五によれば臨水縣はは

じめ宋の潞陽縣の地におき、北齊天保元年西曆五五〇松谷にうつし、北周建德六年西曆五七七故涉城にう

つし、隋開皇七年西曆五八七西戌にうつし十年西曆五九〇今の場所にうつすといふ。かくのごとくその

縣治はしばしば變遷してゐるが、『寰宇記』のいまの場所とは昭義縣であつて、これは太平

興國元年西曆九七六昭德縣と改められ、熙寧六年西曆一〇七三省かれて鎮王存元豐九となつた。『金史』地理志、

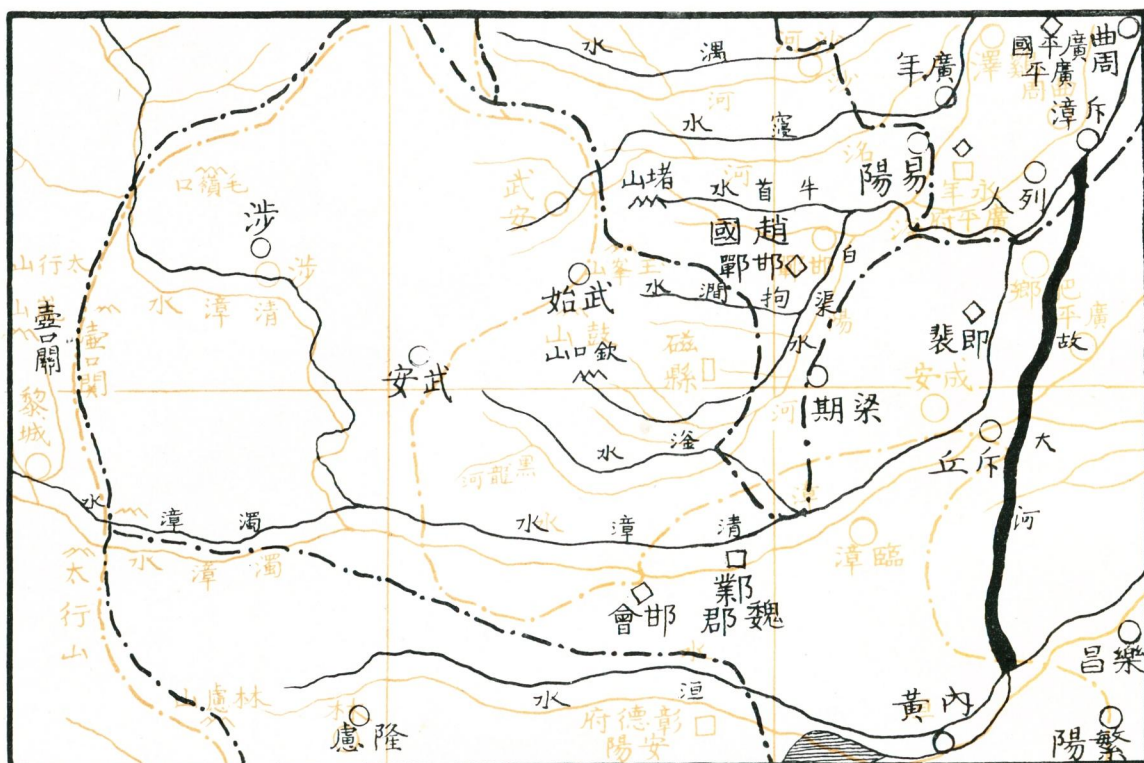
潞陽縣の屬、臨水鎮はすなはちこれであつて、いまの臨水村とよぶ部落は一圖版その故址を示す

ものであらう。³⁾ 故涉城は清漳水流域の涉縣の地であるが、松谷と西では臨水村に遠からぬ

土地であらう。李吉甫『元和郡縣志』卷一によれば曹魏の臨水縣は唐の潞陽縣であつたとい

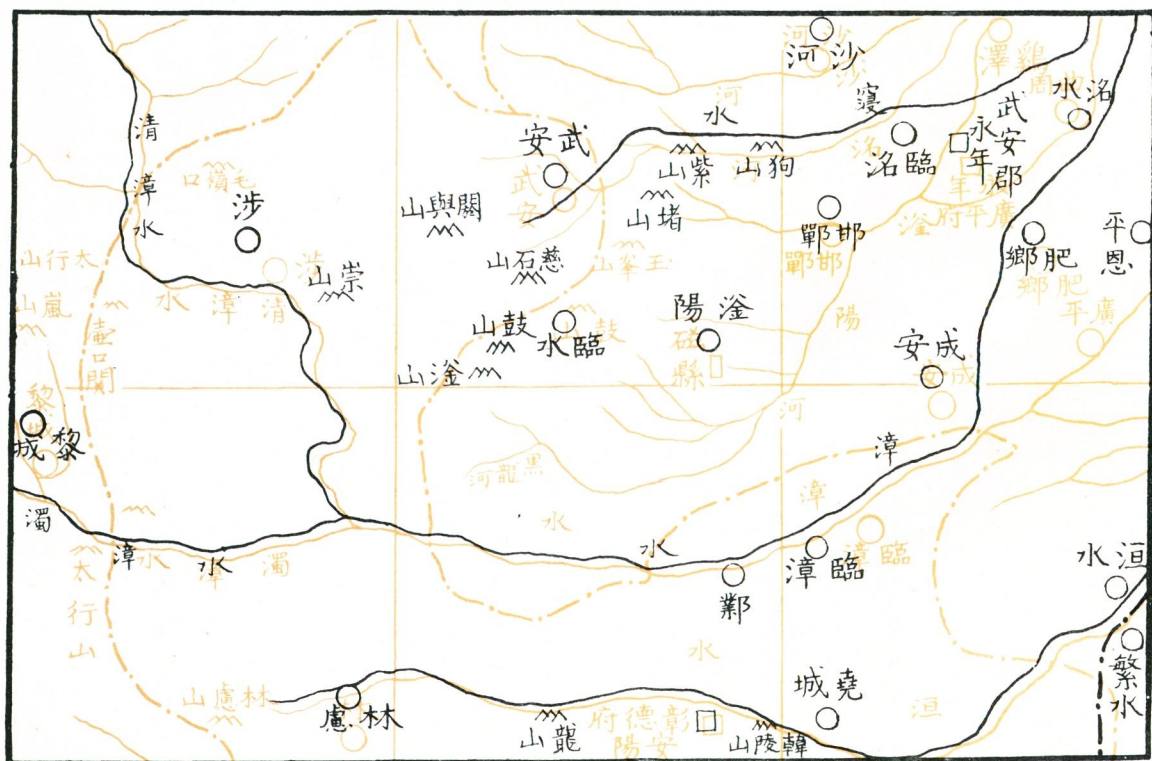
ふが、唐の潞陽縣は臨水村あたりでなく、むしろもつと東方いまの磁縣の地にあつたらうと

響堂山附近地理沿革圖



前漢地理圖

(楊守敬·歷代地理疆域圖)



隋地理圖

(楊守敬·歷代地理疆域圖)

思ふ。これはまた別である。

晉もこれにより司州廣平郡に屬した。晉書地理志西晉が滅亡西曆三一七後北支那には五胡十六國の興亡を見たが、そのうち石趙西曆三一五—三五二は鄴に都し、その土木の經營につとめた。かくて滏水、鼓山も再び京西の名勝となつた。

北魏に至つて臨水は一時眞君六年—太和二十一年
西曆四四〇—四九七鄴に併され、東魏再び鄴に都が置かれるとともに天平初西曆五三四には魏尹に屬した。北齊天保初西曆五五〇に縣治が松谷にうつされたこと前記のとほりである。後周は臨水縣の別に滏陽縣を置きともに滏陽縣に郡治をもつ成安郡に屬したが建德六年西曆五七七臨水縣を廢した。滏陽縣はもとより滏水の北岸にあつたが、臨水縣とはおのづから別地隋書地理志、元和郡縣志卷一九であつた。臨水が滏口に近かつたに對し、滏陽は東方にあり、正にいまの磁縣附近に位置したものと思ふ。

隋では滏陽と臨水とはもと成安郡に屬したが開皇三年西曆五八三郡を廢し、縣は相州河南省安陽縣に屬した。開皇十年西曆五九〇慈州を置き、滏陽はこれの附廓となつた。慈州の名は縣西九十里にある磁石を産する磁山にもとづく。しかし縣西九十里の磁石山は鼓山、滏山4)とともに臨水の管下にあつたらしい。大業二年西曆六〇六慈州は廢せられて縣は相州に屬した。武安縣は永年縣河北省廣平府に治する武安郡に統轄され、榆溪あり、閼與山あり、寢水ありといはれる。隋書地理志、元和郡縣志顧祖禹は『讀史方輿紀要』卷四十九武安縣武安城の條において「故城は縣の西南五十里にあり」とし、戰國以來の武安をこれにあて、隋以後の武安を今日の位置にあてゝゐるのはしたがつべき

である。⁵⁾

唐は武徳元年^{六二八}武安郡を洛州、滏陽を磁州とし、滏陽、臨水、成安の三縣を領せしめたが、同六年^{六二三}臨水縣をやめ、貞觀元年^{六二七}磁州を廢し、滏陽、成安の二縣は相州に隸した。しかるに永泰元年^{七六五}に至つて相州の滏陽、洛州の武安、邯鄲、さらに新設の昭義等の四縣をもつてまた磁州を復した。昭義縣は滏口の右、もとの臨水の地に特置されたのである。^{新唐書地理志元和郡縣志}磁州は隋代では慈州と書いた。唐では河東に別に慈州があるので、石を加へ礪州^{元和郡縣志}と書き、或は心を省いて磁州^{舊唐書地理志}と書いた。それでも磁・慈が同音なので、天祐三年^{九〇六}惠州と改め、後唐に至つてまた磁州とした。^{新唐書地理志太平寰宇記}

宋金元は同じく武安と滏陽は磁州に屬したが、明の洪武初^{西曆一三六八}に至つて滏陽の名は廢され、磁州と武安とは河南省彰德府に屬した。^{大明一統志卷二八}清初はこれを襲ひ、雍正四年^{西曆一七二三}遂に磁州のみ直隸廣平府に隸し、武安縣を河南彰德府に屬^{大清一統志卷一七}せしめて、もつて今日に及んだ。

(1)『漢書』地理志にはどうしたことが滏水のことが見えぬ。『山海經』北山經郭注に「今滏水は臨水縣の西、釜口山に出づ、鄴の西北を經、列人縣に至つて漳に入る、その水熱し」といひ滏水と白渠水とを同じものと解してゐるやうである。

(2)『元和志』は松谷を松釜に作る。

(3)『寰宇記』卷五六には「滏口泉は縣の西一里にあり、鼓山南脚に出で、流れて縣界に至る」といふ。この縣は昭義縣、すなはちもとの臨水縣であつて、これが滏口泉まで一里であるとすればいま臨水村よりも西方になる。

(4)『元和郡縣志』卷一九は礪山といひ、『隋書』地理志は慈石山といふ。

(5)しかし『元和縣志』卷一九には「武安故城は縣の西南五里にあり」とある。

2 北齊時代における滏口陘

響堂山、すなはち鼓山の南端、神臺山との間にある斷絶部を滏口といふ。これより太行山脈を越える滏口陘の重要さは顧祖禹の『讀史方輿紀要』卷四十九磁州の條を見ればすぐわかるが、鄴を首都とし、晉陽を別都とした北齊時代には特に重要な交通幹線であつた。

北魏の衰亡するや爾朱氏は晉陽に據つて權力を振つた。北齊の始祖神武帝高歡ははじめ晉州刺史、平陽公に封ぜられ、また爾朱兆の囑をうけて六鎮の反殘を統轉して陽曲に牙營を置いたが、間もなく劉貴を使者として兆に請はしめて曰く、「頻歲霜旱、降戸（すなはち六鎮）の反殘のこと」は黃鼠を掘りて之を食ひ、皆面に穀色なし、徒らに人の國土を汚す、請ふ食を山東に就き、溫飽を待つて之を處分せん」と兆その議にしたがひ、高歡は晉陽を發して滏口に出る。けだし、太行山脈東麓の河北平原に據らんとするのである。しかるに高歡は途上において洛陽から來た爾朱榮の妻北郷長公主に會ひ、馬三百匹を奪つた。これを聞いた爾朱兆は叛意を察し、これを追うて襄垣に追つたが、たまたま漳水が暴漲して橋梁を失ひ、水を隔てゝ相對するのみ。高歡はこれより壺關大王山に舍し、滏口に向つた。これから將に滏口に出ようとするとき、「倍ねて約束を加へ、織毫の物も侵犯を聽さずと、將に麥地を過ぎんとすれば神武輒ち歩いて馬を牽く、遠近之を聞いて皆高儀同を稱す」。すゝんで鄴に屯し糧を相州刺史劉誕に求むるに誕供せず、軍營の租米をとり、「遂に冀州に據る」とある。

北齊の高氏が鄴に居をかまへた事情はかくのごとくである。それに至る太原よりの經路はまた右に示すごとく、はじめ沁水にしたがつて遡り、襄垣に出て濁漳水に沿うて下り、壺關を経て滏口に出たものである。これが當時における鄴都・晉陽間のもつとも普通なコースであつたと見える。

永熙元年^{西曆五三二}正月、大丞相柱國大將軍太師を拜し、閏三月、爾朱氏の聯合軍を韓陵の一戦で敗り、天下の大勢は決した。ついで滏口より入つて晉陽の爾朱兆を逐ひ、こゝに大丞相府を置き定居し、天平元年^{西曆五三四}に至つて孝靜帝を擁して鄴に都せしめた。晉陽は對宇文氏軍事の根據であるのみならず、また鄴の死命を制する要地でもあつた。その大任を擔ふ交通幹線がこゝにいふ滏口陘である。^{北齊書帝紀二}

元象五年^{西曆五四二}高歡崩じ、高澄すなはち世宗文襄帝魏の禪をうけ、都を鄴に奠めたが、晉陽の重要さは少しも變ることなく、その往來は相變らず頻繁である。高洋顯祖文宣帝、孝昭帝、武成帝から後主に至るまでこの關係はかはらぬ。^{北齊書帝紀三}

後主に至つて北齊もやうやく衰運に向ひ、北周の壓迫は甚しく、遂に武定七年^{西曆五四九}晉陽に敗れて後主は鄴に奔り、「王公に詔して含光殿に議す、孝珩以へらく、……宜しく任城王をして幽州の兵を領し、土門に入らしめ并州に趣くと揚聲せしめ、獨孤永業をして洛州の兵を領し、潼關に趣き、長安へと揚聲せしめ、臣は請うて京畿の兵を領し、滏口に出で、鼓行逆戰せば敵は南北兵有るを聞いて自然に潰散せん」と。^{北齊書卷一}しかるに齊主之を聽かず、周師は晉陽より

滏口に出で直ちに齊主を逐うた。北齊書卷八 右が北齊衰亡の事情である。これらの諸事實によつて北齊時代における滏口陘の重要な役割もほゞ理解できるであらう。

3 鼓山・滏水・滏口祠

鼓山

宋「永初古今山川記」太平寰宇記卷五十六所引記に「鼓山は石鼓の形二所あり、南北相當り、俗語に南鼓北鼓といふ、相去ること十五里」¹⁾。隋の「冀州圖經」太平寰宇記卷五十六所引には「鄴城の西に石鼓あり、鼓自ら鳴れば即ち兵あり、魏都賦に神鉦高轡に迢遞たりと云ふは是なり、高齊末鼓鳴る、未だ幾くもならずして鄴城に兵あり、而して齊滅ぶ、隋文帝の季年に又鳴り數百里に聞ゆ」²⁾といふ。鼓山の名は「永初古今山川記」にはじめて見えるが、音聲を發することをいはない。「魏都賦」の神鉦高轡に迢遞たりを李善注のごとく鼓山のことゝすれば早くからそのことが有名であつたと見える。「隋書」地理志、「元和郡縣志」にも鼓山の名が見え、いまの響堂山もこれに關係ある名稱であらう。「大清一統志」以下には響堂寺、常樂寺の名が見えてゐる。

鼓山は滏水の發源水經注等であるが、「山海經」には滏水の發源として神、響山があり、「漢書」地理志には白渠水の發源として欽口山があるが、「山海經」の郭注によれば白渠水も滏水らしい。郭注では滏水の發源は滏口山である。或は滏山といふ。「淮南子」墜形訓高誘の注には滏水の來源として景山が挙げられてゐる。「隋書」地理志には滏山のほかに慈

石山あり『元和郡縣志』卷十には磁山といふ。磁山といふのは磁石を出すためであるが、『隋圖經』太平寰宇記五十六には之を滏口山といひ、『本草』太平寰宇記五十六にも磁石は石鼓山に出づといふ。適確にこゝといふことはできないが、とにかくこのあたりの山をよんだものであらう。

滏 水

『戰國策』には「魏の武侯は殷紂の國なり、孟門を左にし、漳滏を右にす」といひ、『魏都賦』文選卷六にも「北漳滏に臨む」といひ、古來漳水とならび稱されてゐる。『山海經』北山經には「神囷之山、釜水出、東流して歐水に注ぐ」といふ。

『淮南子』墜形訓には「釜は景に出づ」とあり、高誘の注につきのごとくいふ。「景山は邯鄲の西南にあり、釜水の出づる所、南して漳に入る、その源は沸湧して、勢は釜中の湯の如し、故に釜と曰ふ、今之を釜口と謂ふ。」

『山海經』北山經郭注には「今滏水は臨水縣の西、釜口山にあり、鄴の西北を經、列人縣に至つて漳に入る、その水熱し」といふ。これは『漢書』地理志の武安縣欽口山に發源する白渠水と同一視してゐるやうである。今日の滏陽河にほかならない。

『水經注』太平御覽卷六十四所引にいふ。「滏水の發源は石鼓山南巖の下に出づ、泉源奮湧し、滾々として湯の如し、その水冬は溫く夏は冷し、崖上に魏世立つる所の銘あり、水上に祠あり、能く雲雨を興す、滏水東流して漳に注ぐ、これを合河と謂ふ。」今本『水經注』卷一には「漳水又北、滏水入る」とあるのみである。滏水の靈異を説いてゐるのである。鼓山の靈異とともに注

意すべきである。

湓口祠

湓口の祠は既に『水經注』卷一にいふところのごとくで、よく雲雨を興す靈驗をいふが、「佛圖澄別傳」太平御覽卷六十四所引には佛圖澄の靈蹟としてつぎの記事を載せる。「石虎のとき、正月より雨ふらず、澄は湓口の祠に詣り、稽首曝露した、すると、即日二白龍が祠下に降り、是において雨は千里に遍し」と。

いま鼓山南巖にある泉源を晉祠泉といひ、その南にあるを黒龍洞といふ。

- (1) 『太平御覽』卷五六に引く所小異あり、「石鼓の形の如し」といひ、俗語云はなく、「相去ること十里」とある。
- (2) 『太平御覽』卷五六に引く所に同じ。

又殊歸利曰佛言世尊何故名般若
波羅蜜佛言般若波羅蜜無邊無際
無名無相非思量無歸仁無洲渚者無

種法希有。其人乃可調伏。譬如象馬。懶慢不調。加諸楚毒。乃至徹骨。然後調伏。元量大悲。生是佛土。維摩詰言。此土菩薩。難者。以大乘法度樂。小乘以諸善根濟。意以智慧攝。愚癡說除難法。彼報伐一切眾。生受諸苦。當不復功德。盡以施之。等心眾生。謙下。元關於諸菩薩。視之。十天人。皆救阿。多羅三菴三菩提心。十千菩薩。得元生法。忍菩薩。行品第十。殊師利。與諸大眾。亦放圍繞。發意欲來。故先為此。瑞應。於是維摩詰。語文殊師利。可中。其諸善。隨即皆避。坐。稽首。佛足。亦繞七匝。於一面立。諸大弟子。釋梵四天王等。亦可思議。非意所圖。非度所測。今時阿難。白佛言。世尊。今所聞。香自昔未有。長為何香。是香。氣住。當入如維摩詰。言至此。飯消。曰。此飯久如當消。曰。此飯勢力。至于七日。然後乃消。已得无生忍。食此飯者。至一生補處。然後乃消。譬如。有藥名曰。上味。其有服。而住佛事。有以佛所化人。而住佛事。有以菩提樹。而住佛事。有以佛衣服。卧具。而住。像水。而月熱時。炎如是等。喻。而住佛事。有以音聲。語言。文字。而住佛事。或有清淨。佛。是名。以一切諸佛法。門菩薩。入此門者。若見一切淨好。佛土。不以為喜。不貪。不著。若。色如是。見諸佛。色身。有若干耳。其元闕慧。元若平也。阿難。諸佛。色身。或相。續。姓。或定。難若我。廣說。此三句義。汝以劫壽。不能盡受。正使三千大千世界。滿中眾生。皆如阿。勿起是意。所以者何。我說。汝於聲聞中。為最多。聞非謂菩薩。且也。阿難。其有智者。不。化所不能住。今時眾。香世界。菩薩來者。合掌白佛言。世尊。我等初見。此土生。下。谷。

約
1/4

約
1/4

人。言。重。寶。運。過。餘。路。無。中。一。人。是。唱。諸。善。男。子。勿。得。取。捨。女。等。當。稱。觀。世。音。菩。薩。名。早。是。菩。

世界。中。昔。隨。聞。受。提。示。見。如。是。佛。神。力。故。皆。各。各。各。國。不。動。智。佛。乃。至。伏。怨。智。佛。乃。至。海。湄。梵。行。今。時。一。人。是。唱。深。法。隨。覺。如。自。性。常。觀。三。世。法。不。生。止。是。想。多。遠。所。緣。境。未。曾。起。妄。想。而。元。眾。主。想。不。現。有。耳。趣。永。離。諸。想。想。內。常。樂。禪。寂。而。死。繫。心。想。彼。人。天。諸。法。相。專。念。正。思。惟。常。不。覺。樂。性。樂。於。解。脫。道。具。足。平。樂。慧。波。住。家。城。去。一。切。智。廣。大。如。性。善。入。真。實。諦。教。化。諸。羣。生。破。成。眾。勝。意。是。財。方。使。三。寶。道。是。意。能。到。是。日。覺。道。是。財。不。便。力。心。猶。虛。三。

5 無量義經 南洞



6 佛名三種 第二洞



9 隋李君營造像記 南洞南



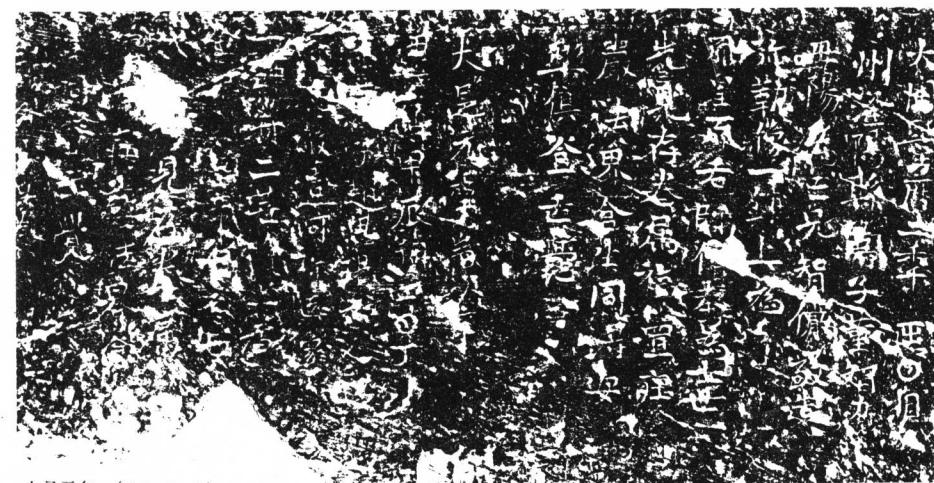
大業七年 (AD.611)

10 唐□嵐造像記 中洞外



顯慶四年 (AD.659)

7 董智力母陽造彌勒像記 第一洞



聖歷二年 (AD.699)

8 趙思塲造彌陀像記

約 1/4



大足元年 (AD.701)

約 1/4

附錄三 響堂山石刻錄

- 一、この響堂山石刻錄は今回の調査中に製作した拓本にもとづき、また現地での判讀と諸家の著録とを参照して作成した。
- 一、本所に缺くるものには*を附して待訪の意をあらはした。明代以後のものは畧にしたがつた。
- 一、石刻錄文は洞別に配し、そのうち佛典についてはこれを省略し、たゞ「大正新修大藏經」所收の文と對校し、これが異同を記すことにとゞめた。宋刊本以後の異同は略した。
- 一、石刻目は造像記・題記を一類とし、紀年順に配列し、無紀年のものはまとめて後に付した。つぎに石經・佛名等を一類として掲げた。各項下の所在において南、北とあるはそれぞれ南響堂山、北響堂山の略である。
- 一、從來の石刻目では表題のみで、所在をあきらかにせぬため、果して同一物か別物かの判定に苦しんだ。待訪碑目中若干の重出はやむをえないところであらう。またその土地も南北響堂山のいづれかわからない。それらはやむなくたゞ磁州、或は響堂山等の地名をいれるにとゞめた。
- 一、この石刻錄編纂に際しては主として小野勝年君を煩した。

参 考 書 及 略 號

金石存十五卷 吳璿玉	金 存	櫟古錄二十卷 吳式芬	櫟 古
八瓊室金石補正百二十卷 陸增祥 補 正		畿輔碑目二卷 樊彬	畿 碑
		畿輔通志、廣平府志、南北響堂寺及其附近石刻目錄所引	

藝風堂金石文字目十八卷	繆荃孫	藝風	廣平府志卷三五	廣平
續寰宇訪碑錄	畿輔通志、廣平府志所引	續寰	河朔金石目	河朔
	顧燮光			
補寰宇訪碑錄五卷	趙之謙	補寰	河朔訪古新錄	河朔訪
			顧燮光	
續補寰宇訪碑錄二十五卷	劉聲木	續補寰	河朔新碑目三卷	河朔新
			顧燮光	
再續寰宇訪碑錄二卷	羅振玉	再續寰	南北響堂寺及其附近石刻目錄	響堂
	南北響堂寺及其附近石刻目錄所引		何士驥、劉厚滋	
求是齋碑目	畿輔通引志所	求是	校碑隋筆	校碑
			方若	
歷代金石分域編	畿輔通志、廣平府志所引	分域	支那佛教史蹟第三冊	佛蹟
			關野貞、常盤大定	
金石彙目分編二十卷	吳式芬	彙目	支那美術史彫塑篇	彫塑
			大村西崖	
畿輔通志卷一四八		畿通	亞東第四卷九號	亞東

第一部 響堂山石刻錄 錄文

〔南 響 堂 山 〕

第一 洞

一、大方廣佛華嚴經

四諦品第四末「分別印或名入相」より
如來光明覺品第五、菩薩明難品第六
を経て淨行品第七の終に至る

分書。右壁と前壁左右にある。

〔石刻例2〕

右壁、百五十五行四十字前後。四諦品第四末「分別印或名
入相」より如來光明覺品第五「注以百川流」に至る。

前壁右、四十六行五十八字前後。如來光明覺品第五「其味
无別異諸佛法如是」より淨行品第七「種種欲智」に至る。

前壁左、四十二行五十五字前後。淨行品第七「小師當願衆
生」より淨行品第七末に至る。

東晉佛跋陀羅譯（大正新修大藏經、第九卷所收）。

及十方十佛刹 宋元明本同ジ、新修本ナシ

大方廣佛華嚴經如來光明覺品第五

百億如來般涅槃 新修本同ジ、正倉院本涅槃ニ作ル

來詣佛所。謂文殊師利菩薩 新修本所字アリ

樂色華色。瞻蔔華色 新修本同ジ、正倉院本舊ニ作ル

金剛色。皤皤色

出現無世間 新修本于ニ作ル

有百億閻浮 新修本ナシ

明行人師子 新修本天ニ作ル

或時見戲笑 新修本戲笑ニ作ル

常行大慈心 新修本悲ニ作ル

相一相皆冢滅 新修本切ニ作ル

是則墮目顛倒 正倉院本同ジ、新修本瞽ニ作リ
舊宋本、宋元明本翳ニ作ル

悉能現諸佛正法 正倉院本見ニ作ル

十世界微塵數菩薩 新修本ナシ

無塵穢。冢然不動 新修本同ジ、舊宋本、宋元明本垢ニ作ル

了達所緣境。未曾起妄想。新修本同ジ、舊宋本覺ニ作ル

是諸深妙道。无比方便力。正倉院本則ニ作ル

見彼苦衆生。孤煢无救護。正倉院本、舊宋本、宋元本同ジ、新修本憊ニ作リ、明本笑ニ作ル、

无間无救處。

一切三有海。新修本同ジ、舊宋本毒ニ作ル

自覺深妙法。舊宋本、宋元明本學ニ作ル

皆悉能遍至。

正念奉諸佛。新修本心ニ作ル

十方靡不現。新修本同ジ、舊宋本、宋元明本見ニ作ル

一切无所著。

充滿虛空界。正倉院本華嚴經第五終六字、舊宋本卷第四終四字、宋元明本卷第五終四字アリ

大方廣佛華嚴經菩薩明難品第六

亦如明燈炎。炎不暫停。新修本焰ニ作ル

知法悉虛妄。新修本同ジ、正倉院本空ニ作ル

始終无異相。

云可衆生或受苦。新修本何ニ作ル

出聲音不同。新修本穀ニ作リ、舊宋本聲ニ作ル

雨滯无分別。

能生種種牙。

猶日无雲噎。新修本同ジ、舊宋本、宋元明本翳ニ作ル

能生種種牙。正倉院本同ジ、新修本芽ニ作ル

色色受受想行行識識欲界色色界色界無色。

界無色界。癡癡愛愛。舊宋本同ジ、新修本緣返シナク、十四字

撫濕則能滅。新修本撫ニ作ル、舊宋本權ニ作ル

種種諸銷餠。正倉院本同ジ、新修本看膳ニ作リ、舊宋本、宋元明本銷饌ニ作ル

譬如響晴人。

善奏諸音樂。正倉院本、舊宋本、宋元明本同ジ、新修本聲ニ作ル

能度无量衆。新修本同ジ、舊宋本、宋元明本渡ニ作ル

讀歎檀波羅密尸。

譬如空堅城。正倉院本、舊宋本同ジ、新修本讀ニ作ル

防禦諸敵難。舊宋本、宋元明本同ジ、正倉院本、新修本御ニ作ル

安樂諸菩薩。新修本同ジ、舊宋本、宋元明本隱ニ作ル

新修本答二作ル

廠經淨行品第七

成就

新修本同ジ、正倉院本正二作ル

波羅 新修本同ジ、正倉院本羅字アリ

重禪波羅蜜

大正新修本尙二作ル

本熏に作ル

本院舊宋本
新修本院二作ル

元明刊本誦二作ル

肩院本同ジ、新修本海智ニ作ル

院本、舊宋本、宋元明刊本、新修本、三作ル

層院本、舊宋本同ジ、新修本懺怕ニ作ル

修本同シ、舊宋本耗ニ作ル
元明刊本耘ニ誤ル

正新修本正二作ル、以下同ジ、

修本正シク惡ニ作ル

正倉院本、舊宋本、宋元明刊
本同ジ、新修本得ニ作ル

新修本熏二作儿

新修本 二作ル

正倉院本 舊宋本 宋元明干
本同ジ、新修本嚙ニ作ル

正倉院本境ニ誤ル

正倉院本、舊宋本同シ、新修本重二作ル

貳戒
埤岸
猗倚

拔菓園飭飾癡厭惱·惚惱

澡 咸 盛 取 最 曷 畏 桀 禁 曷 量 量

讚 烹 閑 竄 幻 甚 甚

漂
了
金
復
煩
魔

沮

金輪榜記

正面右端柱。

□ □ □
● ● ●

于滿福金輪、

三 隋袁子才造釋迦像記

開皇八年
西曆五八八

左壁下方隋龕の間、左右に隋の三尊龕あり、どちらのため
の銘か不詳、圖版九B、一〇A。

開皇八年四月八日。佛弟子袁／子才。仰亡父母。
敬造釋迦像／壹 區。所願亡父母。託零淨域。／
遊神佛土。上爲國祚永隆。聖躬／常樂。次及現在
眷屬。恒居昌／樂。一切品物。皆獲[?] 妙果。龍花
／三會。俱登正覺。／袁子才并妻呂。一心侍佛。

四 令狐勝造藥師琉璃光佛記

聖曆元年
西曆六九八

方柱左面基壇 右に佛立像の、尊龕がある。
圖版八B、向つて右下

大周聖曆元垂五區廿八^〇。令狐勝爲亡兄[□]。敬
／造二藥師琉璃光像一軀。勒石裁龕。像曰[□]建。
／通光座高。尺有五寸。雕鏤既畢。^{靈相}粲然。丹
菓／耀脣。青蓮湛目。眉光曉闢。如昇多寶之臺。
／毫相朝披。似入毗耶之室。伏願以斯功德。滋益
亡／兄。含識有靈。同登覺路。

五 董智力母陽氏造彌勒像記

聖曆二年
西曆六九九〔石刻例9〕

方柱左面基壇にある、上に三尊座像龕、下に五尊倚尊龕が
ある。おそらく下の龕に附したものであらう。圖版八B。

大周聖曆二垂 區^〇。相／州潞陽縣。弟子董智
力／母陽。爲亡兄智儼。敬造／彌勒像一鋪。上爲
／甌皇甌后師僧。奉爲七世／先亡。見存眷屬。福
置莊／嚴。法界蒼生。同得安／樂。俱登舌覺。

六 趙守訥妻陳氏造阿彌陀像記

大足元年
西曆七〇一

方柱左面基壇、右に三尊座像龕あり、圖版八B。

大周大足元垂二區廿四^〇。趙守訥妻陳四娘。爲
何[□]患。願得差。敬造／彌陀像一鋪。合家大少。
一心供養。

七 趙行[□]三娘造像記

大足元年
西曆七〇一

左壁、最奥隋龕の下、佛一尊座像龕の右肩にある。

圖版八A。

大周大足元垂二區廿一^〇。趙行／女三娘、
患。願差。敬造／像一軀。

八 趙思暘造阿彌陀像記 大足元年「石刻例10」

方柱左面境、聖曆二年董智力母陽氏造像記の右にある、上に三尊座像龜あり、圖版八B。

大足元牽歲次辛／丑四匝甲辰朔四○丁／未。闍子趙思暘。爲父／□。一心敬造阿彌陀像／一鋪并二菩薩。上爲／□□皇帝。下爲七／代先亡。見存眷屬。／福□莊嚴。法界蒼／生。同登正覺。□□□□。合家 供養。

九 爲亡妻陳造觀音地藏菩薩像記 長安□□年西曆七〇一—四年

方柱正面左端、圖版五B、二尊龜の右方にあり、龜のみは圖版一〇B 向つて右端に見ゆ。

大周長安□□□□爲亡妻陳。敬造觀世音／并地藏□□存□□眷屬。一心供養佛。

一〇 男玄恪等造阿彌陀像記 □□□□年

左壁前方、圖版一〇A、向つて右方に見ゆ、上に五尊座像龜あり、銘の下一角は後刻龜のため損傷をうける。

大周、／、／。相州、／、／。

處機、／男玄恪、／娘□男玄皎 皎妻、

／女拾肆娘□□敬造、／陀像壹鋪。上爲、／而后師僧。奉爲七代、／現存眷屬。倡□、／嚴。法界蒼生。同、／安樂俱登正覺。

一一 蘇□君成等題記 天祐十八年西曆九二一年

拱門側、左側にあり。圖版四C。

天祐十八年八月十日。蘇□君成李山韓渾。

一二 邢州沙河縣范因題記

左壁下方にある、二菩薩立像の下にあり、圖版一〇A、後刻なり。

邢州沙河

縣范广

第二洞

一三 文殊師利所說般若波羅蜜經 「石刻例1」

前壁左にあり。分書、十行十四字。大正大藏經第八卷般

若部四に收める梁曼陀羅仙譯、「文殊師利所說摩訶般若波羅蜜經」(七三一頁上)の一節、文殊師利白佛言、世尊何故名般若波羅蜜」から「無念無作故」までとそのあとに「知諸衆生心性本淨……名爲捨心」の四十字がある。前者は宋元明刊本及舊宋本に字句全く一致し、ただ「非行非不處」において行字を脱す。また同巻に收める梁僧伽婆羅譯本には右の行字あり、劈頭には「文殊白佛言」といふが、その他は全く相合する。後半をここに録すれば左の如くである。

知諸衆生心性本淨。是名爲慈觀。於一切等如虛空。是名爲悲斷。一切意名爲意心。遠一切行。名爲捨心。

一四 般若經？

後壁、隧道内、二十行八字。

善男子諸佛天所從／來去亦无所至何以／故諸法如不動相諸／法如即具佛无生法／无來无去无生法即／是佛无□滅去无來／无去无□滅法即是／佛實際法无來无去／實際法即是佛空无／來无去空即是佛善／男子无染无來无去／无

染□是佛寂滅无／來无去寂滅即是佛／虛空性無來无去虛／空性即是佛善男子／離是諸法更无佛諸／佛諸法如一如无分／別善男子是如常一／无□无三出諸數法／无所有故

一五 十六佛名號

〔石刻例6〕

周壁諸龕の傍にある。右壁前方から始つて後壁を經、左壁前方に終る。龕傍十二個所に十六の佛名をいれる。「法華經」化城喻品第七、大通智勝如來の世に出世した十六佛である。(大正大藏經第九卷二五頁) いま第二須□□□、第五虛□□□の字を缺く。第七常相佛は帝相佛の誤。第十度一切世間佛も大藏經には度一切世間苦惱佛に作る。第九阿彌陀佛の下前記般若經末に

比丘法貴共養

第九阿彌陀佛 主比丘惠景共養

とあるのはおそらく阿彌陀佛のための供養記で、般若經刻經のためではないと思はれる。諸佛の方向は化城喻品に合しない。

一六 因觀草創等文字(造窟願文?)〔第十三圖〕

洞外左壁。分書、いま一行十二字を見る。後修の石築の

中に埋れて全文はうかゞひ難い。この洞開鑿の願文であらうか。

、於此因觀草創。遂發大心。廣捨現□、

一七 統定禪師造六十佛記 〔第十四圖〕

心柱右面左端、分書。

、統定禪師 敬造
六十佛

一八 田神證妻崔造彌勒像記 證聖元年
西曆六九五

右壁下部奥より第二龕右にある、佛尊一立像の龕、圖版一六C。

維大周整壁元垂歲次乙未九區景午朔十乙卯。
佛弟子安陽縣田神整妻崔。敬造彌勒像一、
爲一切含識、靈、登、。

一九 比丘尼十一娘造阿彌陀像記 證聖元年
西曆六九五

右壁下部、奥より第三龕の右にある。三尊座佛龕、下に二獅子あり、圖版一六C。

維大周整壁元垂歲次乙未九區景午朔十乙卯。
清信佛弟子比丘尼十一娘。□爲亡父金龕母□。

敬造阿彌像一鋪。并二菩薩二師子。并及法界衆生。俱登正覺。

二〇 比丘尼因道安造像記 證聖元年
西曆六九五

右壁下部、奥より第四の龕の右にある。正書、おそらくこの龕のためにつくられた銘であらう。三尊座佛龕。圖版一六C。

維大周整壁元年歲次乙未九區景午朔十乙卯。
清信比丘尼佛弟子丘道安、壁□皇帝。
并及七代先靈。見存眷屬、并二菩薩。及三、

二一 佛弟子萬道安造阿彌陀像記 萬歲通天元年
西曆六九六

右壁下部、奥の龕、二佛並座、左右に脇侍菩薩立像あり、圖版一六C。

萬歲通元垂拾區貳拾捌。佛弟子萬道安、平安、王。下及師僧父母、敬造阿彌陀式軀。并、菩薩。今得成□。合家壹心。供

養佛時。

二二 王弘安妻吳造觀音像記

聖曆二年
西曆六九九

左壁下部。右に觀音立像龕あり。

因周聖曆二季二匝／廿②。佛弟子王弘安／妻

吳爲□主行□／□平安無災患。敬／造觀音菩薩。將普同此福。

二三 高沖子造觀音像記

聖曆二年
西曆六九九

右壁下部、王弘安妻の造龕に並んで觀音立像龕あり、その右にこの銘あり。

大周聖曆二季九匝／廿②。高沖子爲任行。願平安無災患。敬／造觀音菩薩一／軀。願共一切衆生。共／同此福。

二四 龐老妻等造阿彌陀佛等記

大足元年
西曆七〇一

方柱右面基壇、二龕あり、前方龕の左方にあり。

大周大足元季歲次辛丑八匝辛／丑朔十八②戊子。龐老妻□／□娘大娘。敬造阿彌陀佛一軀／

二菩薩。□□□□俱登正覺。

二五 武后長安造像記

方柱左面基壇、菩薩立像龕の右にあり。

大周長安、、、、

二六 趙祖福造阿彌陀像記

神龍元年
西曆七〇五

方柱左面下部。

維神龍元□歲次乙巳三月庚辰朔廿七日景午。

仏弟子清信／趙祖福。□涕曉沫。來之苦海。積／

脩十善。知見在之愛河。□六趣／之輪迴。同四界

之因。□願身清／告。合家眷屬。並悉平安。禍消

福／生。無諸災障。抽滅淨財。敬造阿／彌陀佛

一鋪。上爲聖神 皇／帝。下及法界衆生。同得福

因。常／聞正覺。

二七 傅忠造阿彌陀像記

景龍二年
西曆七〇八

右壁下部、奥より第四龕下方、この銘の右方に三尊座佛龕あり、圖版一六 C。

景龍二年四月八日。弟子□／忠。敬造阿彌陀像一鋪。上／爲 皇帝。下及倉／生。俱哉愛河。齊

□／佛□願、／淨土、

二八 傳大娘造觀音像記 景龍二年
西曆七〇八

前壁左下、左右に菩薩立像あり、圖版一五B。

景龍二年三月二、／□上爲父。敬造觀、／

□天王天后。下及、／眷屬。法界倉生。俱、

二九 眞□眞造像記 景龍二年
西曆七〇八

前壁左下、右方に菩薩立像あり、左方に地藏觀音二尊あり、圖版一五B。

景龍、／、／、佛弟子、／、／、／、／、／、／、職上爲、／、／、

三〇 吳四娘造地藏觀音勢至像記 景龍四年
西曆七一〇

後壁刻經下、右方に半跏像を中心に菩薩立像を左右に配した三尊あり、圖版一五A。

景龍四年二月十日。弟子／吳四娘。爲父母。敬造地藏／菩薩。觀世音菩薩。大世主／菩薩。上爲天

皇天后。自爲／□□□。合家大小。俱登正／覺。

三一 荆□□等造地藏觀音像記 先天元年
西曆七一二

方柱左面、左端、下に地藏半跏、觀音立像の二尊あり、圖版一五A。

先天元年四月四日。佛弟／子荆□□、二女郭件／娘。敬造地藏并。觀世／音菩薩二軀。上爲聖神／皇帝。七世先亡。師僧父母／俱越□□。登覺道。

三二 西國胡僧子闍三藏弟子實際寺西國題記 開元五年
西曆七二七

前壁左方、文殊般若經の一部に追刻する。

開元五年二月十二日。／西國胡僧子闍三藏弟子京大實際寺僧／、／三人、／。弟子李希誕。

第四洞

三三 妙法蓮華經觀世音普門品第廿五〔石刻例3〕

左壁、前壁、右壁の三箇所にある。右壁四十一行十三・四字。品首より「有如是等大」まで。前壁三十七行十五・六・七字。「威神力多所饒益」より「應以天龍夜叉乾」まで。左壁三十五行十三・四字。「闍婆阿脩羅」より終に至る。羅什譯 大正新修一切經第五七卷

本章の偈なし。

其[○]若有乃至一人 新修本ニ同ジ、スタイン敦煌本ナシ、

尙不能惡眼視之 新修本以字アリ

便得離痴无盡意薩 新修本ナシ

設欲求男禮拜恭敬觀世音菩薩 新修本供養ニ作ル

應以執金剛神得度者即現執金剛神 新修本身ニ作ル、スタイン敦煌本、

博物館本、舊宋本、宋元明刊本ミナ神ニ作ル

是故汝等當一心供養觀世音菩薩 新修本應字アリ

皆号[○]爲施[○]畏者天盡[○]菩薩 博物館本ナシ

即解頸衆寶珠纓絡 新修本同ジ、博物館本僅ニ誤ル

遊於娑婆世界。尔時持地菩薩 新修本等今本ミナコニ無盡意菩薩ノ偈五言百四句ヲイレル

異字

漂漂 剝殺 解解 因因 執執 惚惚

痴癡 形形 不不 工丘 夷夷 颺颺 櫟櫟

三四 舍利弗等文字

外壁前額、十九行三字。

舍利弗／佛云何／佛云何／□□□／□□□不／

□去非／非相是／爲佛□／□身□／□佛亦／

□有智／□□□／是名□／□□□／□法无／

□有□／□□□／□有□／□力音

三五 李華暉侍佛記

〔第二十圖〕

後壁右端。

觀世音像

侍佛信女

李華暉

三六 清信女爰公主榜記

〔第二十圖〕

後壁左方。

世

主清信女

爰公主

三七 曹子緒侍佛記

〔第二十圖〕

後壁右方。

曹子緒

曹子緒侍佛

三八 馮子昌供養記

〔第二十圖〕

前壁左。

菩薩主馮子昌

佛弟子 田 遵侍佛時

佛弟子

阿彌陀像主馮子昌供養

三九 佛弟子

〔第二十圖〕

拱門右側。

佛弟子

付与桓

四〇 開皇十三年銘記

開皇十三年
西曆五九三

洞外右方、碑形、圖版一八A。

□□太素之始。墳書瘞滅。既分既立。、、、／□

□食四性靈壹等。未有彼是彼非此眞此、、、

／□心於彼此故理契於不貳。並息意於眞僞。是
、、、／□岐爽路。似派分流。怡神攝養。則稱
黃老。遺諸、、、／□風。屑白玉以成渥。變黃
金而作水。猶是輪迴窟、、、／□□无上大聖。
是号法王。自覺覺人。知□知物。慈、、、／□灑
之者。終渡苦海。此□□諸像□□之處山、、、
／□□眞容彫瑩。世之相實炳。靈質儼然。八十
之、、、／□時默□覺從淪。大隋靈運。大捨
區宇。三寶、、、／□河東桑泉人也。以開皇十
三年一月。剖符此縣。、、、／如蘭常馥。枝分
派別。皆稱甲祧。所在著姓。盡居望、、、／流
非聞思至王稚之爲溫縣□德□慙史起之□、、
、／誠目觀□顏嘆未曾有內心起旋外口亦宣□
捨、、、／□□。四池迭逼。雨天未遣。三乘乃
驗。以開皇十、、、／□承□訓。長習家風。悼
基堂之□構。念拆薪之、、、／□沒□恨□不

右壁基壇、葛石にある、下の格狭間内に菩薩一尊立像龕がある、圖版一九B。

王思道妻賀。願身平安。敬造觀音菩薩一軀。普願一切衆生。見存父母。共同安樂。不入苦海。常行供養。一切諸仏。

四六 奚摩子侍佛記

洞外左方西面、下に細高き佛龕がある、圖版一八B。

願現存。安樂延年。苦。值佛聞法。又爲七、亡。法界衆生。俱時佛。清、女奚摩子侍佛。

四七 貴郷縣人康法樂供養記

洞外左南面、右方に菩薩立像龕がある、圖版一八B。

菩薩主。貴郷縣人康法樂。并身供養。

第六 洞

四八 諸行无常偈

外壁前額。四行四字。北凉曇無讖譯「大般涅槃經」(大正藏經、第十二卷四五〇頁)卷十四の偈なり、圖版二八A。

諸行无常。
是生滅法。
生滅滅已。
寂滅爲樂。

四九 翊軍將軍順陽郡樹造阿彌陀觀音像記

開皇四年
西曆五八四

洞外右南面にある、龕は東面して三尊龕、高一米二五、幅八〇釐、甌子香爐の寶壇あり、尖拱及び蓮華飾の八角柱がある、銘文には兩俠倚を觀音と記す、圖版二五A、二七A。

大維開皇四年歲次甲辰九月庚申朔廿一日庚辰。佛弟子翊軍將軍順陽郡樹。爲妄妻女華。敬造阿彌陀佛壹軀。觀世音菩薩。願法界衆生。斷一切惡。徧一切善。願從今身。乃至佛身。共一切衆。同誦大乘。

五〇 王輝兒造阿彌陀像記

開皇八年
西曆五八八

洞外左、南面壁、左方に三尊佛の龕がある、圖版二八C。

維大隋開皇八年。四月巳。亥朔。廿一日巳酉。

佛弟子王輝兒。敬造阿彌陀像一軀。并二菩薩。顏現。身延年。无諸苦患。眷屬。生々世々。值遇。又。顏七世先亡。及法界蒼生。同沾此福。聆顏如。前明威將軍金鄉縣散々、

五一 綽造阿彌陀像并二菩薩記 開皇十二年 西曆五九二

洞外入口の上にある。左方に三尊佛の龕がある、圖版二五A。

大維開皇十二年。歲次壬子。四月丙子朔八日癸未。佛弟子綽。爲亡考。敬造阿彌陀像。并二菩薩。此像廻番作。顏法界衆生。无諸苦患。及諸眷屬。安樂延年。生々世々。值遇諸佛。又顏七世先亡。善顏伎身。乃至佛身。共一切衆。同誦大乘。俱時作佛。

五二 王大貞等造彌勒觀音地藏菩薩記 聖曆二年 西曆六九九

洞外、右、南面壁、下に三尊佛像龕がある、圖版二五A。

大周聖曆二季。九匝廿。滄陽縣飮山鄉王大貞及一妻高。上爲神皇師僧。下見存父母。合家無災難。七代先亡。群生淨土。敬造彌勒像。觀音菩薩。坐藏菩薩。供養。普共一切含生。俱發无上道心。惣覺。

五三 郭義國等造阿彌陀觀音勢至菩薩記 長安二年 西曆七〇二

洞外左、南面壁。三尊座像龕の上にあり。

大周長安二季。歲次壬寅一匝。戊戌朔十四。辛亥。滄陽縣郭義。張玄靜姊妹大娘五娘六娘。爲母周。敬造阿彌陀像一鋪。并觀音大世主二菩薩。衆生々々。

五四 郭方剛造阿彌陀像記 長安三年 西曆七〇三

正面基壇葛石にある、この右方に三尊藏像龕がある、圖版二六。

維大周長安三季。九匝八。郭方剛。自執父之喪亡。載矣體膚。垢身骸骨丘。

□□机筵傳慕／□□欲報之恩／□化人理爲亡父。／□□阿弥陀像一／□。□天皇天后／七代先亡。一／□□俱登／□覺。

五五 郭剛□十兒造菩薩像記

正面基壇、格狭間の上にある、下に菩薩立像龕がある、
圖版二六。

郭剛／□十／兒。□造菩／薩一軀／

五六 郭胡子造菩薩像記

正面基壇、格狭間の上にある、下に菩薩立像と供養像の龕がある、圖版二六。

郭胡／子爲／逆行／願欲／平安／相見。／敬造
／菩薩／一軀。

五七 李義節造阿彌陀像記

神龍元年
西曆七〇五

右壁基壇、前より第一龕と第二龕の間にある。いづれも三尊座像龕である。圖版二六

維神龍元年八月日。佛弟子／天敬村李義節。爲
亡舅／德潤。敬造弥陀像。一佛二菩／薩。上爲

天皇天后。下／及師僧父母。七世先亡。／法界衆生。俱登正覺。

五八 佛弟子張□造彌勒像記

太極元年
西曆七二二

洞外東東面壁、右に菩薩立像龕あり。向つて左からはじまつて右に及ぶ。

太極元年一月／十九日佛弟子／□張□法敬造
／弥勒佛一區上／爲鑿神皇帝／□□□□、

五九 郭方山造阿彌陀像記

開元五年
西曆七二七

前壁右基壇の側にある、龕は後方に向ひ、三尊座像である。

大唐開元五年歲次／癸巳。正月壬寅朔。廿三日
／大成。佛弟子郭方山／爲合家痼病。敬造阿弥
／陀像一鋪。上爲天皇天后。法／界倉生。俱登正
覺。

六〇 郭五□造阿彌陀像記

開元五年
西曆七二七

左壁基壇、左方に三尊座像龕がある。

開元五年／國次癸巳正／月寅朔。廿日戊
午。佛□／□子郭五／□爲父在□／□兄。敬造

阿彌陀像 一 上爲天皇 法界衆

三〇一

六一 郭方剛造阿彌陀像記

開元十二年
西曆七二三

郭壁基壇葛石にある、下に三尊座像がある。

開元十二／☐正月卅／☐。佛第／☐郭方／☐副

家／☐安。敬／☐弥陀像？／上爲天皇／下及法／

覺

六二 尉元貞妻皇甫五娘造救苦觀音像記

開元廿三年
西曆七三五

入口右側。右方に菩薩立像龕がある。

成安縣人。元貞妻。皇一甫五娘。上爲皇帝。下爲

一師僧父母。敬造救苦觀一世音像一軀。合家供

養。時／開元廿三年四月廿三日記。

六三 佛弟子□方□造像記

開元廿三年
西曆七三五

右壁基壇葛石にある、開元廿三年なるべし、下に三尊座像龜がある。

元[?]廿[?]三／正月二／佛弟子／方

六四 荊州太原縣造像記

洞外東面壁、右に菩薩立像龕がある。文章は向つて左より右へ向ふ。

荆州太原縣 ☐ ☐ 永隆 ☐ 父母及合家 ☐ ☐

好身／供養 祥顔／佛 道

六五 許懷袁等供養記

洞外右東面、開皇四年龕の下にある、左方に座像龕がある。

佛弟子許懷袁供養

佛弟子趙四海供養

佛弟子鄭高兒供養

六六 陽元□題記

洞外左面壁、隋龕の左方にある。

陽元 ☐ ☐ ☐ 、 、 、 、 、 郭 、 、 、

六
七
節度副使陳渙等題記

西曆一九九四年

楣額にある、圖版二五A

慈州節度副使蒲坂／陳渙□明。暨慈州軍／事判

官涑水張□□／□鳴道。敬謁□□下。維／大金承

安四年。歲次己未。仲秋末旬二日。書。

六八 澄陽丞明威僕敦公□等題記 大安元年
西曆二二〇九

楣額にある、圖版二五A。

澄陽丞明威僕敦公□□到此。全弟敦武神信甫。
□游者／首涯彦。溥于□。□伯達。蔡鎬仲。周
陳植。袁甫。趙仲源。躬甫。陳／漪溫甫。汽道。趙
淵深甫。王知仁／壽之。皆大安己巳孟冬□□
／□□古儀之謹識。

第七洞

六九 蕭處仁等題記 至順元年
西曆一三三〇

入口右側にある。

至順改元秋七月。古相蕭處仁。同安陽／丞李巨
綱。臨汾尹馬治成。史□明等觀。

西方洞

七〇 崔公人戶綦珪等造彌勒像記 太平興國七年
西曆九八二

右壁

磁州澄陽縣崔公人戶綦珪等。於上方院修造到。

彌勒佛壹尊伍事相。／院主僧義志 壹人美

壹人吳美／都料申瑄。壹人王興。壹人李超李

顏／太平興國七年四月二十一日修。

七一 陳氏蓋殿題記 大定十年
西曆一一七〇

洞外左壁

大定十年四月。中彭城村陳氏蓋殿□。

七二 創建響堂寺石欄杆記 嘉靖四十四年
西曆一五六五

第三洞外にあり。

創建響堂石欄杆記

夫響堂寺。在磁西彭城鎮左。其關鑿功巧。山川形
勝。已倍載前記矣。今考其建置。始於齊天統元年
乙酉。歷至我／朝永樂壬辰重修。堂上原有佛閣。
登路有階梯。迄今日久。復爲敝廢。一日鎮人胡承
使、兩泉、西冶。遊豫於寺。因澤館／客。鎮社携
之。及至觀其敝廢。兩泉。西冶曰。此寺坐在行山

澗中。湓水源上。山川風氣。東南遶磁。鍾奇毓秀。發育異一才。正在是也。敝廢如此。可不修之。惜閣上堂前。聆少欄杆。登之者寒心。可不建之。澤問。聆廢。兩泉曰。吾二人各出一金若干。外設席。請親友若干。再積金若干。約廢可足矣。兩泉諾之。遂各歸而實行。聆謀。果積金入數。時維乙酉之一月日。值庚辰之吉。自督起工。不期月。閣重脩。而佛重塑。堵重砌。而欄創建矣。可喜者。建欄以石。更日久也。煥然一新。形勝如舊。美哉美哉。澤以常人之修寺觀廟院者。或作緣取利。或求福一己。今二君修此堂閣。建此欄石。爲磁一風水。果有科甲之應。繼此而文風大振。功延永世。揚名流芳。咸是今日之意見力行。迥出人表所致也。固用記之。以紀歲月。兩泉諱世榮。西冶諱明。督工王月。胡得水。助力之諸君。姓名咸紀后。大明嘉靖肆拾肆年歲次乙丑夏伍月吉旦立。磁

陽後學生磁臺子李天澤頓首。董□僎并書篆。／
庠生 郭仁 趙仲仁 王琚 王德興 胡進朝
李達椿 社仲□／ 布政司 承差 王尹 張
繼亨 蘭里 張貴 胡朝相 胡世魁／ 省祭
李鑰 楊云 張金 劉茂 郭富 胡世元／
同社損貲人 □虎 閔選 溫美胡朝臣 楊□
斗。焚修香火住持 僧人 道住 興同 興震
祖智 □□ 元斌 明清／ 刊字匠人 笛釜
山 常雲 馮威 霍進礼 劉光亮 牛江 韓
木廣

〔北響堂山〕

南 洞

七三

無量義經德行品第一、偈讚〔石刻例5〕

拱門左右、右、十六行二十一字左、十八行二十一字南齊
曇摩伽陀耶舍譯、（大正新修大藏經第九卷三八四・五頁）

智恬情泊。慮凝靜。

新修本怕ニ作ル、舊宋本、宋元明刊本同ジ

淨眼明鏡。上下眇。

新修本照ニ作ル、舊宋本、宋元明刊本同ジ

脣舌。赤好若丹花。

舊宋本舌口ニ作リ、花華ニ作ル
新修本舌同ジ、花葉ニ作ル

胸表万。字師子臆。

新修本記ニ作ル、舊宋本、宋元明刊本萬ニ作ル

手足斯軟具千輻。

新修本柔ニ作ル

臂脩肘長指且纖。

新修本直ニ作ル、舊宋本且ニ作ル

投心表敬誠殷勤。

新修本虔ニ作ル、舊宋本、宋元明刊本同ジ

稽首歸依妙種。相

新修本幢ニ作ル、舊宋本、宋元明刊本同ジ

梵音雷震響八種。

新修本擲ニ作ル、元明刊本同ジ

遊戲藻浴法清渠。

新修本池ニ作ル、舊宋本、宋元明刊本同ジ

我等咸復共稽首。

以下三句二十一字毎ニ上二句ヲ缺ク、石築中ニ埋没セルカラデアル

異字

寐寂 短短 戒戒 雪雪 匈胸 面面 開

開 勑整 旋旋 細紺 髮髮 濡軟 不不 膝膝

筋筋 鎖鎖 尋尋 脛脛 得得

七四 維摩詰所說經 全 「石刻例4」

第一壁 右方 五十六行百一字、首五行のみは六十四字。首

より第十品第三「富樓那、此比丘久發大乘心中忘此意」まで
第二壁 右方 三十六行百一字、第十品第三「如何以小乘法」より
菩薩品第四「以是天盡燈令天數天」に至る

第三壁 左方 五十行百一字、毎行上六字を缺く、觀衆生品第七「善不善孰爲本」より佛道品第八「是其入不二法門說是入不」に至る

第四壁 左方 三十五行百一字、佛道品第八「二法門時於此衆中」より菩薩行品第十一「生死無數」に至る

第五壁 左方 四十三行百一字、末五行は各六十七字、菩薩行品第十一「劫意而有勇」より終に至るまで

鳩摩羅什譯（大正藏經、第十四卷）

一名不可思議解脫。佛國品第一

新修本上卷二字及ビ姚
アリ、正倉院本同ジ

。長者子寶積。新修本於是二字アリ、正倉院本同ジ

悉見世間諸所有。新修本同ジ、正倉院本之ニ作ル

國生厭離或斷疑。新修本同ジ、正倉院本法ニ作ル

悉知衆生來去相。新修本同ジ、正倉院本去來ニ作ル

達諸法相無罣礙。新修本同ジ、正倉院本遠ニ作ル

皆已發阿耨多羅三藐三菩提心。新修本同ジ、正倉院本以ニ作ル

三十二相莊嚴衆生。來生其國。新修本同ジ、正倉院本其身柔和四字アリ

不見如來佛國嚴淨。正倉院本同ジ、新修本土ニ作ル

。方便品第二一。新修本維摩詰所說經六字アリ、正倉院本ナシ

深殖善本。新修本植ニ作ル、正倉院本同ジ

一心禪寂。攝諸亂意。新修本同ジ、正倉院本定ニ作ル

雖復飲食而以禪悅。新修本同ジ、正倉院本腹ニ作ル

入治政。法救護一切。新修本同ジ、正倉院本、元明刊本正ニ作ル

入諸學堂誘開童蒙。新修本蒙ニ作ル、正倉院本同ジ

內官中尊化正宮女。新修本政ニ作ル、正倉院本、元明本同ジ

諸人者此可患厭當樂佛身。新修本仁ニ作ル

從戒定。慧解脫解脫知見生。新修本同ジ、正倉院本智字アリ

從^布施戒善忍辱。新修本持戒ニ作ル

從^止觀生。

爲諸問疾者。新修本同ジ、正倉院本病ニ作ル

。弟子品第三。新修本維摩詰所說經六字アリ、正倉院本同ジ

於三界^現身。意。新修本同ジ、正倉院本口字アリ

憶念我昔於貧里。新修本同ジ、正倉院本昔者入三字ニ作ル

以空聚^想入於聚落。

本^固不燃。今則无滅。新修本然ニ作ル

乃能如是其誰。不發阿耨。新修本聞此二字アリ、宋元明刊本同ジ

非得果。非凡夫。新修本非不得果四字アリ、正倉院本、元刊本同ジ

尼捷陀若提子等。新修本捷ニ作ル、正倉院本乾ニ作ル、宋元明刊本同ジ

聞此。茫然不識。新修本語字アリ、宋元明刊本同ジ

解脫者則諸法也。新修本相字アリ

汝不能知衆生根源。新修本同ジ、正倉院本原ニ作ル

彼自无創。勿傷之也。新修本瘡ニ作ル

五百佛所殖。衆德本。新修本其他植ニ作ル

五^受陰^洞達空無所起。

優波離。正倉院本婆ニ作ル（以下同）新修本其他波ニ作ル

憶念昔者有二比丘。正倉院本時ニ作ル

我。答言。正倉院本、宋元明本同ジ、新修本即字ヲ増ス

羅睺羅夫出家者。宋元明本同ジ、新修本夫字無シ

離衆雜惡摧諸外道。新修本同ジ、正倉院本伏ニ作ル

能救諸疾人。可密速去。正倉院本宋元明本同ジ、新修本仁ニ作ル

當有何疾當有何病。新修本病字惱ニ作ル、正倉院本、宋元明三本コノ四字ナシ

得無近佛而謬聽邪。正倉院本也ニ作リ新修本同ジ

菩薩品第四。新修本維摩詰所說經ノ六字ヲ冠ス

爲用何生得受記乎。正倉院本授記ニ作ル、新修本同ジ、以下同ジ

若彌勒。滅度者。正倉院本同ジ、新修本得ノ字アリ

一切衆生當滅度。正倉院本、宋元明本同ジ、新修本應ニ作ル

持戒是道場得願具。故。新修本同ジ、正倉院本足字アリ

是道場不懈退故。正倉院本、宋元明本息ニ作ル、新修本ハ同ジ

捨有爲法故。諦是道場。新修本正倉院本同ジ、宋元明三本四ノ字アリ

魔以汝等與我今。汝皆。新修本同ジ、正倉院本汝今ニ作ル

修諸功德樂嚴道場。新修本同ジ、正倉院本、宋明本莊ニ作ル

樂。近善知識。正倉院本同ジ、新修本樂ノ下ニ親ノ字ヲ増ス

一天女見諸大人。新修本其他同ジ、明本天ニ作ル

尔時天安

觀諸菩薩華不著者以。正倉院本、宋元明本同ジ、新修本已ニ作ル

以何爲證辯。乃如是。

天曰我無得無證。新修本同ジ、正倉院本答ニ作ル

故辯如是。新修本同ジ、正倉院本辨ニ作ル

若有得有證者則。宋元明本同ジ、新修本、正倉院本即ニ作ル

周窮濟之。正倉院本、宋元明本同ジ、新修本同ニ作ル、之ノ字新修本其他之ニ作ル

是天女曾已供養九十二億。佛已。正倉院本同ジ、新修本已曾ト作ル、宋元明本佛ノ字ノ上ニ諸ノ字ヲ加フ

佛道品第四

衆生无有悲闕。新修本同ジ、正倉院本、宋元明本礙ニ作ル

示入形殘。宋元明本同ジ、新修本刑ニ作ル

生佛種性中。宋元明本同ジ、新修本姓ニ作ル

示有妻妾采女

起於我見。如須彌山。新修本同ジ、正倉院本於字ヲ缺ク、見字ノ下心字アリ

塵勞之疇。新修本同ジ、明本儔ニ作ル

而今我等

以爲自覺悟。新修本音ニ作ル

爲之起慈悲。宋元明本同ジ、新修本心ニ作ル

後令入佛智。正倉院本、宋元明本同ジ、新修本道ニ作ル

居前而慰安。新修本同ジ、正倉院本於ニ作ル

於无數億劫。宋元明本同ジ、新修本量ニ作ル

會中有菩薩。新修本同ジ、宋本舍ニ作ル

无念即无分別。元明本同ジ、新修本則ニ作ル

師子。菩薩。新修本同ジ、正倉院本吼字ヲ加フ

於其申不入。字缺ケタルモ、字數ニヨリ新修本ニ同ジ、正倉院本中ノ下ニ間字アリ

无縛无解不然不滅。然字摩滅セルモ下ノ點ヲ存ス、生ノ字ニ非ズ、正倉院本、明本同ジ、宋本燃ニ作リ、新修本生ニ作ル

是空種性。新修本同ジ、正倉院本虛空ニ作ル

知諸種性者。新修本同ジ、正倉院本法字アリ

三法門。時於此。正倉院本、宋本同ジ、新修本品字アリ

衆中五千菩薩。千ノ字摩滅スルモ上部ヲ存ス、新修本同ジ、元本十二作ル

維摩詰所說經卷中

香積佛品第十

問衆菩薩。諸仁者。正倉院本、宋元明本同ジ、新修本菩薩下言字有リ

汝行到彼如我辭曰。行字新修本性ニ作ル、辭字新修本同ジ、宋元明本詞ニ作ル

今現在於五濁。世。正倉院本同ジ、新修本惡字アリ

至維摩詰舍。維摩詰 新修本時字アリ

諸菩薩皆坐其上。是化菩薩。皆坐新修本同ジ、正倉院本坐皆ニ作リ、宋元本是ヲ時ニ作ル、石刻ノ字ハ憑セルモ或ハ時字カ、正倉院本是字ヲ缺ク

猶故不賜其諸菩薩。正倉院本、宋元本同ジ、新修本勸ニ作リ、明本勸ニ作ル

以大乘法度樂小乘。以諸善根。正倉院本同ジ、新修本者字アリ

菩薩行品第十一。新修本維摩詰所說經ノ六字アリ

唯然已見。汝意云何世尊。宋元明本同ジ、新修本於字アリ

作佛事有以飲食。新修本飯食ニ作ル

功德平等爲教化衆生。正倉院本、宋元明本同ジ、新修本數字ヲ缺ク

倦阿難汝見諸佛國土。新修本厭倦ニ作ル

爲父母想道品。法。正倉院本同ジ、新修本之字アリ

佛土開門大施具足相好除一切惡淨身口意生无

死數。開門大施正倉院本同ジ、新修本行無限施ニ作ル、相好新修本同ジ、正倉院本想好ニ作ル、淨身口意新修本同ジ、正倉院本身口意淨故ニ作ル

常求无念實相智慧行。新修本同ジ、正倉院本實相ノ二字ヲ缺ク

於世間法行少欲知足於出世間求之无獸新修本同ジ、此十二字正

倉院本宋元明本ニ缺ク

而不捨世。法不壞威儀。世法宋元明本同ジ、新修本間字アリ威儀正倉院本、宋元明本同ジ、新修

本法字アリ

觀於寂滅而不永寂滅。新修本寂字ナシ、正倉院、宋元明本ハ同ジ

諸正士菩薩已脩此法。正倉院本、宋元明本同ジ、新修本以ニ作ル

是名盡无盡解脫法門。新修本同ジ、正倉院本无関ニ作ル

散遍三千大千世界。新修本同ジ、正倉院本遍散ニ作ル

。見阿闍佛品第十二新修本維摩詰所說經ノ六字アリ

我觀如來前際不來後際不去。新修本同ジ、正倉院本不來ヲ不去、不去ヲ不來ニ作ル

順三脫門。三明與等。正倉院本、宋元明本同ジ、新修本具足ノ二字アリ、

同眞際等法性。新修本同ジ、正倉院本實際ニ作ル

无憂无喜无獸。无已有无當有。新修本无著ノ二字アリ、元明本同ジ

幻作男女寧沒生也。新修本耶ニ作ル

沒者爲虛誑法壞敗之相。正倉院本、宋元明本同ジ、新修本敗壞ニ作ル

日光出時則无衆冥。正倉院本、宋元明本同ジ、新修本即ニ作ル、以下同ジ

爲化衆生。不與愚闇宋元明本同ジ、新修本故字アリ

現妙喜國不動如來。正倉院本同ジ、新修本无ニ作ル

上至阿迦耆吒天。新修本賦ニ作リ、宋元明本尼ニ作ル

。法供養品第十三新修本維摩詰所說經ノ六字ヲ加フ

脩治佛道安處道場。正倉院本同ジ、新修本菩提ニ作ル

以一一全身舍利。正倉院本令ニ作ル

其人殖福寧爲多不。新修本植ニ作ル

世界曰大莊嚴。正倉院本、宋本同ジ、新修本名ニ作ル

王有千子端政勇健。新修本正ニ作ル

當廣爲汝說法之供養。新修本同ジ、正倉院本之字ヲ缺ク

。諸佛所說深經。新修本同ジ、正倉院本謂字アリ

非但分別思惟之所能得。新修本同ジ、正倉院本但非ニ作ル

无我无人无衆生无壽命。新修本同ジ、正倉院本无人二字ヲ缺ク

无我寂滅。能救一切。正倉院本、宋元明本同ジ、新修本之法二字アリ

无違无靜離諸我所。新修本同ジ、正倉院本爭ニ作ル

天帝王子月蓋從藥王佛新修本佛告ノ二字アリ

汝於末後守護法城新修本同ジ、正倉院本護持ニ作ル

得五神通通菩薩道正倉院本同ジ、新修本逮ニ作ル、元明本具ニ作ル

藥王如來所轉法輪新修本同ジ、正倉院本轉ニ作ル

月蓋比丘以守護法新修本同ジ、正倉院本護持ニ作ル

從迦羅鳩村大爲始得佛正倉院本同ジ、新修本孫駄ニ作ル

。囑累品第十四新修本維摩詰所說經六字ヲ加フ

阿耨多羅三藐三菩薩法付囑新修本同ジ、正倉院本法字ヲ缺ク

是爲新學菩薩若於如是新修本同ジ、正倉院本雜ニ作ル、以下同ジ

當知是新學菩薩元明本同ジ、新修本爲字アリ

當知。是弥勒神力之所建正倉院本、宋元明本同ジ、新修本皆字アリ

阿耨多羅三藐三菩提。復當開導正倉院本宋本同ジ、新修本提下法字アリ

阿難言唯。我已受持要者正倉院本、宋元明本同ジ、新修本然字ヲ加フ

解脫法門如是受持新修本同ジ、正倉院本說ニ作ル

維摩經合二万七千五百新修本等ナシ

異字

办分 止丘 倦倦 僕僕 害害

寂寂 冥冥 復復 男男 受授 剎剎 剎剎 剎剎

墮墮 泥泥 泉泉 濡軟 姪姪 波婆 瀾淵 漠寞

嘿嘿 宜宜 真真 求求 其其 幻幻 至至 戒戒

戲戲 或或 或或 各各 明明 首首 眷眷 面面

瘡瘡 疾疾 狀狀 知知 虛虛 老老 耆耆 官官

扈扈 履履 尋尋 闕闕 閉閉 閉閉 爲爲 荅荅

菓菓 苑苑 藐藐 擾擾 義義 散散 數數 印印

哀哀 邴邴 鄆鄆 隨隨 施施 降降 服服 勝勝

惱惱 悉悉 悵悵 悒悒 穉穉 循循 連連 國國

團團 申申 最最 辭辭 亂亂 董董 起起 蛇蛇

壽壽 輩輩 蠃蠃 蠃蠃

七五 石柱佛名

毗舍道首陀能斷除者則見佛性成无上道

貞元六年七月一日李恒(後刻)

蓮佛 精進喜佛 寶火佛 寶日光佛 現无

愚佛 □、、、佛 堅德佛 栴檀功德佛

无量究□佛

財功德佛 德念佛 善名稱功德佛 弘炎幢□

佛 步佛 寶蓮華善住娑羅樹王佛 出決之毗

□□

七六 齊晉昌郡公唐邕刻經記〔第四十圖〕

洞外南面壁

粵若稽古。溯聽風聲。握神紀以應物。遊靈教而至道者有矣。咸弭之在人。道不虛泄。然則軒從七聖。蘭葉傳文。舜共三公。芝萼觀字。周朝關令。望東氣而稽首。止門弟子向北斗而一磬折。天書道記。可略言也。蓋不出於九流。且未聞於三世。我

大齊之君區有義□□／思。家傳天帝之尊。

世祚輪王之貴。一人示見。百辟應生。俯順龜龍。

託迹雲火。翠鳳將寶幢／共舉。靈鼉與灋鼓俱震。

萬機兼十倍之化。四門雜三乘之賔。自迦葉結集。

蔡愔遊返。持綖／之經。盛於茲日。龍宮斯盡。烏載未勝。特進驃騎大將軍。開府儀同三司。尚書令。并州大中／正。食司州濮陽郡幹。長安縣開國侯。晉陽郡開國公唐邕。挺固理時。生而爲世。東文經武／來處廣堂。從扣而鳴。隨病與藥。待群方而似鏡。應衆務其如響。四海仰以彌高。千官悵而／滿腹。眷言法寶是斯歸依。以爲縑緗有壞。簡策非久。金牒難求。皮紙易滅。於是發七處之／印。開七寶之函。訪蓮華之書。命銀鈎之迹。一音所說。盡勒名山。於設山石窟之所。寫維摩／詰經一部。勝鬘經一部。李經一部。彌勒成佛經一部。起天統四年三月一日。盡堯平三／年／歲次壬辰。五月廿八日。潤谷虛靜。邑居閑曠。林疑極妙。艸匹文柔。禽繞空中。獸依樹下。水／音發而覺道。風響動而悟物。戒行之徒允集。慧定之侶攸歸。如日貫雲。常轉不息。□非恐／畏。未苦風寒。石比夜光。非待螢雷。

毗沙上度。勅衆鬼而護持。大梵來遊。領群神而
衛。蕭／因普被。願力薰脩。當使世界。同於淨土。
皇基固於大地。置六道於十山。沐四生於八□
／乃及無邊。皆取正覺。海收經籍。斯文必傳。山
從水火。此方無壞。重宣茲義。乃作銘曰。

天文疊象。人文書契。先聖後賢。道纔身世。惟
皇建國。教通群藝。德實無爲。化窮兼濟。諸／法
爲祖。諸經亦王。一文半偈。與物行藏。天縱上士。
時應有方。群迷升極。至道津梁。殺青有／缺。韋
編有絕。一託貞堅。永聳昭晰。天神左右。天王攬
衛。書未仙遊。字無飛滅。地遙常寂。山／空避喧。
承風覺道。海滯難論。水流可閱。日去無繾。乘衝
誓願。福地常存。

七七 蔣王內人劉媚兒崔磨吉造彌勒像記

龍朔二年
西曆六六二

入口側にあり。

竊以。語極推／極。宗滅無爲之境。因空言／空。

眇觀大千／之界。蔣 王／內人劉媚兒。／崔磨
吉等。敬／想神儀。送緒／來果。於此山／听。造
弥勒像／一鋪。上答／皇恩。下沾僚／庶。師僧父
母／三鄣痼。又／願當來幼渺／緒門。精脩梵／
行。十方衆聖。普供三身。十二部經。受無／遺
漏。願法界／含生。咸登實／除。／龍朔二年七
月十五日建。

七八 蔣王內人安太清造阿彌陀像記

龍朔二年
西曆六六二

入口側

竊以。法身無／像。像應無邊。／實體非形。形／周
萬品。但以／殊徒受化。淨／穢斯彰。寶刹／翹心。
永希安／樂者也。蔣／王內人安太／清敬造阿弥
陀像一鋪。上／爲 皇帝皇／后。殿下諸王。一過
現師僧。七／代父母。法界／含靈。願囑來／生。
童子入道。／恒聞法。三／鄣永除。緣此／善根。
共登正／覺。大龍朔二年／歲次壬戌七月十五日

造。

七九

向約之等遊北響堂山記

宣和二年
西曆二二〇

外室前壁左方

宣和二年三月十八日下方旦。飯已。躡盤道。由
閔子洞。登大像閣。觀磨崖碑。過中嵌。享茶。至
一此。以基爭勝。午後。登天宮。還復憩於此。縱
覽齊唐石刻。令人有感古之意。世傳竹林寺。不
可追訪。而峭山古木。映帶左右。危樓石觀。一
高出人間。數千萬仞。宜爲神物之居。竹林有無。
不必窮也。游息未厭。日已西。乘晚風而下。念
山林薄。塵土累深。徒極回戀。嗟人一生。能
幾輻輳。他時重來寧復偕。今日同游之人也。河
內向約之。濟南張夢授。大梁張望之。汝上季民
望。惠國趙一元禮。夷門徐祖慶。河間李致一。

八〇

圉圉誓造阿彌陀像記

大業七年
西曆六一二

〔石刻例7〕

因隋大業七年。歲在辛未。九月癸未朔。廿四日
丙午。李君晉爲亡妻。敬造阿彌陀像一部。資
益亡者。遠離三塗。超登彼岸。常聞佛法。又願
見存父母眷屬。恒蒙福祐。當來見在。值善值佛。
一上爲皇帝陛下。臣僚百官。下及蠢類含生。
同沾斯福。

南无阿弥佛觀世音菩大勢至菩薩

八一 磁州刺史鄭廻等遊詩

登智力寺上方院詩

磁州刺史鄭廻

驚嶺敬危路不窮。遙疑遙上九□□。年□刹
開初地。幾處花龕在碧空。廻望□迷故國。遂
尋煙翠到天宮。多慙理郡時□□。未去樊籠聚
落中。

攝昭義軍節度叅謀朝散大夫□□□□□諸

軍事磁州刺史臣國賜魚袋鄭廻

、、、、、、二日

毛

弟鄉貢進士達

姪前易州易縣尉緯

男前澶州臨黃縣尉建

男前吳州參軍繼

、、景同遊

八二 行滏陽縣令謝幾綜等遊記

萬歲通天二年
西曆六九七

□□□□軌尋四禪之勝□□□□城畢從。即有

朝議郎行滏陽縣令陳郡謝幾綜。朝議郎行鄴縣令

上柱國瑯琊王希儻。朝散郎行參軍事頓丘李光

登仕郎行錄事上輕車都尉東平呂丸言。給事郎

行滏陽縣主簿隴西李玄泰。通直郎行滏陽縣尉護

軍南陽趙玄貞等。並杞梓椅松。琳瑯珠玉。陪隼

旛於雲表。曳鳧舄於塵外。紆餘碧磴。指梵室而三

一休。迢遞蒼巒。想眞筌而九憩。大矣美矣。康哉

良哉。豈可使百齡芳躅隨陵谷。以一遷繼萬代英

猷。絕蘭菊之芬茂。一題翠琰。再礪玄巖。其可已

乎。乃爲詞曰。一巖巖崐閬。浩浩瀛洲。空傳宵眇

竟絕幽求。豈如丹嶽俯鎮清流。龍宮之敞。鷹宇

煙收其一。却負全趙。前瞻舊鄴。座啓蓮花。林疏

貝葉。毒岫之剗。愛河舟楫。寶衆攸一依。魔徒是

懾其二。穆穆賢守。明明令宰。甚有有成。觀風無

怠。敬之休暇。恭尋葵堦。一兜率何遙。耆闍斯在

其三。羣寮杞梓。列侍珪璋。承驪雲徑。接賞霞莊

圖英之於翠。一瑱。播美躅於青絳。庶蘭芬而桂郁

永峯久而長其四

萬歲通而貳率歲次丁酉臘己巳一已朔貳拾貳

○甲寅

宣議郎行相州滏陽縣尉騎都尉鉅鹿耿一休觀文

會福寺僧慧炬書

智力寺都維那僧道一檢校

八三 董元絢等造彌勒像記

南无弥勒佛□□／弟子董元弟□操／弟元節爲
慈□／□造頽父母生天

八四 七佛觀音名號

南无□□佛／南无式佛／南无維葉

佛／南无拘樓秦佛／南无拘邨含牟尼佛／南无
迦葉佛／南无釋迦牟尼佛／南无觀世音菩

薩

八五 侯元亮題名

侯

元

亮

中 洞

八六

會福寺主□嵐造釋迦像記

顯慶四年
西曆六五九

〔石刻例8〕

□□□□方地□其／□□□□顯慶四年／歲次
回未七月十五／回。濫陽縣會福寺主／□嵐。慕
想真容。尋思／□體。於此山所。上爲／皇帝。文
聖官人。師僧／父母。存亡眷屬。敬造／釋迦像一
龕。其像瑩／□□玉真並□□□蓮金□□
□□／□□善僉□題福。頽／□□谷靈。俱登正
覺。

第二部 響堂山石刻錄 目錄

第一類 造象記・題記類		
五七三 武平三年六	北齊	一 晉昌郡公唐邕刻經記分書〔幾碑上 金存一 幾通二只 補正三 廣平堂 藝風二 河朔四 河朔訪五 佛蹟三 河朔新中響堂〕 南洞七六
五四四 開皇四年二	隋	二 翊軍將軍順陽郡□□樹造阿彌陀觀音像 記正書〔幾碑上 補實二 幾通一只 廣平堂 藝風二 求 是分域 佛蹟三 彫塑 亞東 響堂 彙目三〕
五四六 開皇六年八		三 袁子才造釋迦像記正書〔幾碑上 補實二 幾通 一只 分域 廣平堂 藝風二 攆古六 佛蹟三 彫塑 響堂 彙目三〕 第六洞四九
五四六 開皇六年三		四 王輝兒造阿彌陀像記正書〔幾碑上 補實二 幾通一只 廣平堂 藝風二 校碑 續實 攆古六 佛蹟三 第一洞三
五五二 開皇三年八		五 佛弟子□□綽造阿彌陀像并一菩薩記正 書〔幾碑上 補實二 幾通一只 廣平堂 藝風二 續實 彫塑 響堂〕 第六洞五一
五五三 開皇三年		六 開皇十三年銘記正書〔幾通一只 廣平堂 攆古 六 校碑 分域 續補實五 佛蹟三 響堂〕 第四洞四〇
五五三 開皇三年		七 烏容女造像記分書〔廣平堂 幾碑上 幾通一只 佛蹟三〕 南響堂山
五五七 開皇七年		八 重修滄山響堂寺記分書〔分域 幾通一只〕 磁縣
六二一 大業七年二四		九 李君□□造阿彌陀像記正書〔幾通一只 幾碑上 廣平堂 藝風二 河朔四 河朔訪五 補正七 河朔新中 分 域 金類 再續實上 亞東 佛蹟三 彫塑〕 南洞八〇
五五二 貞觀五年	唐	一〇 洪湛造像記分書〔幾通一只 幾碑 廣平堂〕 南響堂山

六五 顯慶四七二五	一會福寺主□嵐造釋迦像記正書〔幾通四 八幾碑上 藝風三 河朔四 河朔訪五 廣平五 亞東分 城 佛蹟三 河朔新上 中 彫塑 響堂山 龕目三〕	六五 證聖元九二〇	一八比丘尼十一娘造阿彌陀像記正書〔補實 三幾通一 幾碑上 廣平五 藝風四 補正四 分域 續補實二 彫塑 響堂 龕目三〕 第二洞一九
六五 顯慶五	二郎元休造像記正書〔幾通一 幾碑上 廣平三 五 藝風四 河朔四 河朔訪五 再續實上 續補實九 櫟古 六 河朔新中 彫塑 響堂〕 南 洞	六五 證聖元九二〇	一九比丘尼道安造像記正書〔補實三 幾通一 一 幾碑上 廣平五 藝風四 分域 續補實 響堂 龕 目三〕 第二洞二〇
六三 龍朔元	二三造像記〔響堂〕 第二洞	六五 證聖元	二〇高禮澄妻□娘造記正書〔廣平五〕 南響堂山
六三 龍朔二七二五	二四蔣王內人安太清造阿彌陀像記正書〔幾 通一 幾碑上 廣平五 分域 藝風四 河朔四 再續 實上 亞東 河朔訪五 佛蹟三 河朔新中 彫塑 響堂〕 南洞七八	六五 萬歲元二〇二六 通天	二一佛弟子萬道安造阿彌陀像記正書〔幾 通一 幾碑上 藝風四 續補實 彫塑 廣平五 分域 響堂〕 第二洞二一
六三 龍朔二七二五	二五蔣王內人劉媚兒崔磨吉等造彌勒像記 正書〔幾通一 幾碑上 廣平五 分域 再續實上 藝 風四 河朔四 河朔訪五 佛蹟三 河朔新中 彫塑 響堂〕 南洞七七	六五 萬歲通天元	二二元收妻趙氏等造像記正書〔廣平五 幾碑 幾通一 幾〕 磁 縣
六三 永淳二九	二六郭四娘造像記正書〔續補實〕 南響堂山	六五 萬歲通天二	二四□□爲合家造像記正書〔藝風四 彫塑〕 南響堂山
六三 證聖元九二〇	二七田神璧妻崔造彌勒像記正書〔補實三 續 實 幾通一 幾碑上 廣平五 分域 藝風四 彫塑 響 堂 龕目三〕 第二洞一八	六五 萬歲□□ 聖曆元五二六	二五造像記正書〔響堂〕 第二洞 二六令狐勝造藥師琉璃光佛記正書〔補實三

古六 聖曆元	幾通一四八 幾碑上 廣平壹 藝風四分城 彫塑 響堂 龕目三	第一洞四	古二 大足元・二四	古二 大足元・二四	古二 大足元・二四	第一洞七 三四趙思賜造阿彌陀像記 行書〔補實三 幾通一四八 廣平壹 分城 幾碑上 藝風四分城 亞東 響堂 龕目三〕
古六 聖曆二・三	二七田□□造像記 正書〔幾通一四八 廣平壹 續實 幾碑上〕 磁 縣	第一洞八 三五□海造像記 正書〔藝風四分城 廣平壹 續實 幾通一四八 補實三 彫塑〕 磁 縣	古二 大足元・五	古二 大足元・八・六	古二 大足元	第三六龐老妻等造阿彌陀佛等記 第二洞二四 三七趙思獻造像記 正書〔廣平壹 幾碑一四八 續實〕 磁 縣
古六 聖曆三・九・〇	二八王弘安妻吳造觀音菩薩像記 正書〔補實三 幾通一四八 幾碑上 廣平壹 藝風四分城 續實 彫塑 響堂〕 第二洞二二	第三七趙思獻造像記 正書〔廣平壹 幾碑一四八 續實〕 磁 縣	古二 大足元	古二 大足元	古二 大足元	第三八郭尙□造像記 正書〔幾通一四八 廣平壹 分城 幾碑上 藝風四分城 幾碑上 彫塑 響堂 龕目三〕 第二洞二三
古六 聖曆三・九・〇	二九高冲子造觀音像記 正書〔補實三 幾通一四八 廣平壹 藝風四分城 幾碑上 彫塑 響堂 龕目三〕 第二洞二三	第三九郭宅宅造觀音像記 正書〔龕目三〕 南響堂山	古二 大足元	古二 大足元	古二 大足元	第四〇郭義卿等造阿彌陀觀音勢至菩薩記 正書〔續補實二 藝風四分城 亞東 響堂〕 第六洞五三
古六 聖曆二	三〇王大貞等造彌勒觀音地藏菩薩記 正書〔補實三 幾通一四八 廣平壹 藝風四分城 幾碑上 響堂 龕目三〕 第六洞五二	第四一漆陽縣□□□造像記 正書〔廣平壹 幾碑 幾通一四八 藝風四分城 補實三 彫塑 龕目三〕 南響堂山	古二 長安二・二四	古二 長安二	古二 長安二	第四二殘造像記 正書〔續實 幾通一四八 補實三 廣平壹〕 南響堂山
古二 大足元・二・四	三一董知力母陽氏造彌勒像記 正書〔補實三 幾通一四八 廣平壹 藝風四分城 幾碑上 彫塑 亞東 響堂 龕目三〕 第一洞五		古二 長安二	古二 長安二	古二 長安二	
古二 大足元・二・四	三二趙守訥妻陳氏造阿彌陀像記 正書〔補實三 幾通一四八 幾碑上 藝風四分城 補正四五 分城 續實 彫塑 響堂 龕目三〕 第一洞六		古二 長安二	古二 長安二	古二 長安二	
古二 大足元・二・四	三三趙行□三娘造像記〔藝風四分城 彫塑 龕目三〕		古二 長安二	古二 長安二	古二 長安二	

古三 長安三八二四	四三前成均□□□造像記正書〔廣平豎分域 幾碑 藝風四 補實三 彫塑 龕目三〕南響堂山	武周	五二男女恪等造阿彌陀像記正書〔藝風四 續補實豎 彫塑 龕目三〕第一洞一〇
古三 長安三九八	四四郭方剛造阿彌陀像記正書〔補實三 幾碑上 幾通一 廣平豎 藝風四 續實 彫塑 響堂〕第六洞五四	古五 神龍元・三七	五三趙祖福造阿彌陀像記正書〔補實三 幾碑上 幾通一 廣平豎 藝風四 續實 彫塑 響堂〕第二洞二六
古三 長安三	四五玄恭母造阿彌陀像記正書〔補實三 幾通一 幾碑上 廣平豎 藝風四 分域 彫塑 響堂 龕目三〕第二洞	古五 神龍元・三七	五四安世爲身造像正書〔藝風四 彫塑〕南響堂山
古三 長安三	四六殘造像記正書〔幾碑 廣平豎 幾通四 八〕縣	古五 神龍元・四	五五荊義園等造地藏觀音像記〔彫塑 藝風四 響堂〕第四洞四二
古四 長安四・三九	四七李子翕及諸人等造像記正書〔幾通一 幾碑上 廣平豎 藝風四 續補實二 彫塑 響堂〕第四洞	古五 神龍元・三七	五六龐利妻燕造彌勒像記正書〔補實三 幾通一 廣平豎 幾碑上 續實 響堂〕第四洞四三
古四 長安四・五二	四八殘造像記正書〔藝風四 彫塑〕南響堂山	古五 神龍元・八	五七李義節造阿彌陀像記正書〔幾通一 廣平豎 藝風四 分域 幾碑上 續補實二 彫塑 響堂 龕目三〕南響堂山
古四 長安四・九二	四九趙思錫造觀音像記〔藝風四 續補實二 彫塑 幾碑上 響堂〕第四洞四一	古五 神龍元・九	五八王思道兄弟造阿彌陀像記正書〔補實三 幾通一 廣平豎 幾碑上 藝風四 續實 彫塑〕第四洞四四
古四 長安	五〇爲亡妻陳造觀音地藏菩薩像記第一洞九	古五 神龍元	五九王思道妻賀造觀音像記正書〔幾通一 廣平豎 幾碑上 藝風四 響堂〕第四洞四五
古四 長安	五一武后長安造像記第二洞二五	古五 神龍元	六〇弟子妻造像記正書〔廣平豎 幾碑上 藝風四 響堂〕

[illegible]

七五	開元三	八〇	造像記〔響堂〕	第二洞	七三	開元二	八九	孔方造像記〔藝風四彫塑〕	南響堂山
七六	開元四	八一	造像記正書〔續遺幾通一尺補還三〕	南響堂山	七三	開元三正三	九〇	郭方剛造阿彌陀像記	第六洞六一
七七	開元五	八二	郭方山造阿彌陀像記正書〔補實三幾碑上幾通一尺藝風四廣平五續實補實三標古	南響堂山	七三	開元八	九一	開元造像記〔藝風四彫塑〕	南響堂山
七七	開元五	八三	郭五造阿彌陀像記〔補實三〕	第六洞五九	七五	開元元	九二	韓廻秀造像記正書〔廣平五幾碑幾通一尺〕	南響堂山
七七	開元五	八四	薛宏道造像記正書〔補實三幾碑上幾通一四八廣平五藝風四續實補實三彫塑響堂〕	第六洞六〇	七五	開元三正二	九三	佛弟子方造像記	第六洞六三
七七	開元五	八五	大衛國寺僧崇暉等造像記正書〔補實三幾通一尺廣平五藝風四分域幾碑上補實三彫塑標古八亞東響堂彙目三〕	第一洞	七五	開元三西三	九四	薛元貞妻皇甫五娘造救苦觀音像記正書〔幾通一尺幾碑上廣平五藝風四分域標古八彫塑響堂彙目三〕	第六洞六二
七七	開元五	八六	西國胡僧于闐三藏弟子大實際寺〔承慶題記正書〔補實三幾通一尺廣平五藝風四分域幾碑上續補實三彫塑響堂〕第二洞三二	第二洞	七六	貞元四	九五	李恒題名正書〔河朔四河朔訪五河朔新上中響堂〕	第六洞七五
七二	開元〇	八七	薛讓爲身忠造觀世音像記正書〔續補實三標古八〕	南響堂山	七六	貞元八	九六	萬古傳芳等字殘刻〔響堂〕	半山坡小龕上
七二	開元〇	八八	造像記正書〔彙目三〕	南響堂山	八三	元和八	九七	等字造像記〔響堂〕	第六洞
七二	開元〇	八九	造像記正書〔彙目三〕	南響堂山	八三	元和八	九八	太子通事舍人傅陵崔題記〔藝風四響堂〕	南洞
七二	開元〇	九〇	造像記正書〔彙目三〕	南響堂山	八三	元和八	九九	夏侯等題名〔響堂〕	南洞
七二	開元〇	九一	造像記正書〔彙目三〕	南響堂山	八三	元和八	一〇〇	大唐等字造像記〔響堂〕	第六洞

九四 天祐二五 九六 天祐三	五代 一〇一造像記正書〔藝風四〕 南響堂山 一〇二僧法通造像記正書〔藝風四〕 南響堂山	二〇 大定二四三	金 一〇陳氏蓋殿題記正書〔廣平五響堂〕 西方洞七 一一鼓山常樂寺重修大佛殿記〔佛蹟三〕 常樂寺
九八 天祐五 九三 天祐八六〇	一〇三造像記正書〔廣平五響堂〕 南響堂山 一〇四蘇君成等題記正書〔藝風四響堂〕 第一洞一	二五 正隆四 二六 大定二六	一二武安縣下寺莊張氏捨身記并趙福剛造像記〔響堂〕 頂風門嶺
九二 太平興國七四三	宋 一〇五崔公人戶基珪等造彌勒像記正書〔廣平五響堂〕 西方洞七〇	二九 承安四六三 二九 大安元	一三節度副使陳渙等題記〔響堂〕 第六洞六七 一四潞陽丞明威僕敦公等題記〔響堂〕 第六洞六八
一〇四 康定二	一〇六新修七佛記正書〔河朔四河朔訪五佛蹟三河朔新中響堂〕 北洞外	二九 大安元	一五龐古等題名正書〔續補寰三〕 南響堂山
一〇五 喜祐元	一〇七劉汝言杜觀題名〔響堂〕 天宮西宮門堂	三〇 至順元七	元 一六蕭處仁等題記〔響堂〕 第七洞六九
一一八 政和八	一〇八旦覺民題詩行書〔藝風四響堂〕 中洞	三五 嘉靖四	明 一七創建響堂寺石欄杆記碑〔響堂〕 響堂山上層七二
一二〇 宣和二三六	一〇九向約之等遊北響堂山記〔藝風四響堂〕 南洞七九		

無紀年	
一一八滿福金輪榜記 分書 第一洞二	
一一九因觀草創等文字(造窟願文?) 分書 第二洞一六	
〔響堂〕	
一二〇統定禪師造六十佛記分書 〔廣平三五 分城 幾碑 佛蹟三響堂〕 第二洞一七	
一二一李華暉侍佛記 分書 〔幾通一吳 廣平五 藝風二佛蹟三響堂〕 第四洞三五	
一二二清信女爰公主記 分書 〔幾通一吳 廣平五 平豈 藝風二佛蹟三響堂〕 第四洞三六	
一二三曹子緒侍佛記 〔響堂〕 第四洞三七	
一二四馮子昌供養記 〔幾通一吳 廣平五響堂〕 第四洞三八	
一二五佛弟子 題記 〔響堂〕 第四洞三九	
一二六奚摩子侍佛記 第四洞四六	
一二七貴鄉縣人康法樂供養記 〔響堂〕 第四洞四七	
一二八郭剛 十兒造菩薩像記 第六洞五五	
一二九郭胡子造菩薩像記 第六洞五六	
一三〇荊州太原縣 造像記 第六洞六四	
一三一董元綯等造彌勒像記 正書 〔河朔訪五 河朔四 河朔新中響堂 彙目三〕 南洞八三	
一三二大理 郎楚之 妻裴等造像記 正書 〔續補實〕 北響堂山	
一三三韓浪荷等造像記 正書 〔廣平五 分城 幾通一吳〕 南響堂山	
一三四潞州上黨縣佛弟子八仙等造像記 〔彙目三〕 南響堂山	
一三五蕩寇將軍盧遵等造像記 〔廣平五 幾碑 幾通一吳〕 南響堂山	
一三六衛大將軍杜雨隻造像記 〔廣平五 分城 幾通一吳〕 南響堂山	
一三七魏州昌樂縣人劉 禮佛記 〔響堂〕 第二洞	
一三八許懷袁等供養記 第六洞六五	
一三九陽元 題記 第六洞六六	
一四〇邢州沙河縣范 題記 正書 〔幾通一吳 廣平五 分城 幾碑上 攢古九響堂 彙目三〕	

	第一洞一二 一四一石堂之碑〔響堂〕 西方洞 一四二曹禮塔記 正書〔河朔四河朔訪五河朔新中響堂〕 北響堂山 一四三陸郵陸成題名 行書〔河朔四河朔訪五河朔新中〕 北響堂山 一四四侯元亮題名〔響堂〕 南洞八五 一四五寶祖禹題名 中洞 一四六磁州刺史鄭廻等遊詩〔響堂〕 南洞八一 一四七遊智力寺題名〔響堂〕 常樂寺 一四八遊智力寺題詩〔響堂〕 常樂寺 一四九登智力寺十方題詩〔響堂〕 南洞外 第二佛典・佛名類 一大方廣佛華嚴經佛駄跋陀羅譯分書〔幾通一〕	一〇無量義經德行品偈文 曇摩伽陀耶舍譯分書〔幾通一〕 廣平堂 河朔訪五 補正三分 九無量壽經 分書〔河朔四河朔訪五佛蹟三河朔新中響堂〕 南洞 八彌勒下生經德行品偈文〔河朔四河朔訪五佛蹟三河朔新中響堂〕 南洞 七字經 分書〔河朔四河朔訪五佛蹟三河朔新中響堂〕 南洞 六勝鬘經 分書〔河朔四河朔訪五佛蹟三河朔新中響堂〕 南洞 五維摩詰所說經 鳩摩羅什譯分書〔幾通一〕 廣平堂 河朔四河朔訪五 分域 藝風二佛蹟三河朔新中響堂〕 南洞七四 四殘石刻金剛經 分書〔廣平堂幾通 分域 藝風二佛蹟三響堂〕 第二洞一四 三般若經 分書〔幾通一〕 廣平堂 分域 藝風二佛蹟三響堂〕 第二洞一三 二文殊師利所說般若波羅蜜經 分書〔幾通一〕 廣平堂 分域 佛蹟三〕 第二洞一三 一〇廣平堂續寶藝風二佛蹟三響堂〕 第一洞一
--	--	---

城藝風二樓古六河朔新中佛蹟三響堂			南洞七三
一一妙法蓮華經觀世音普門品 鳩摩羅什譯 分書〔畿通二只廣平豈續寶響堂〕第四洞三三			
一二涅槃經 分書〔廣平豈分域〕半山坡柏樹下			
一三諸業无常偈 分書			第六洞四八
一四舍利弗等文字			第四洞三四
一五經文殘刻 分書〔畿通二只廣平豈〕			南響堂山
一六十二部經名刻 分書〔河朔四河朔新上中 河朔訪五補正三藝風二佛蹟三響堂〕	九三建隆三		
一七十六佛名號 分書〔畿通四只廣平豈藝風 二樓古六響堂彙目三〕	九四乾德三		
一八三佛名大字〔藝風二河朔新上〕	九五大平興國七		
一九三佛名大字〔藝風二補正三響堂〕			
二〇七佛觀音名號 正書			南洞
二一石柱佛名〔河朔四河朔訪五補正三河朔新			南洞八四
十中響堂彙目三			南洞七五
二二彌勒佛師佛明炎佛名刻 分書〔河朔四 河朔訪五補正三河朔新上中〕			北響堂山
二三十一佛名號刻 正書〔河朔四河朔訪五河朔 新上中〕			北響堂山
二四大聖十號 分書〔河朔四河朔訪五佛蹟三河 朔新上中響堂〕			南洞
* * *			
二五尊勝陀羅尼經幢〔佛蹟三響堂〕			常樂寺
二六尊勝陀羅尼經幢〔佛蹟三響堂〕			常樂寺
二七尊勝陀羅尼經幢〔響堂〕			響堂寺